

J2.99:19

19 of 20

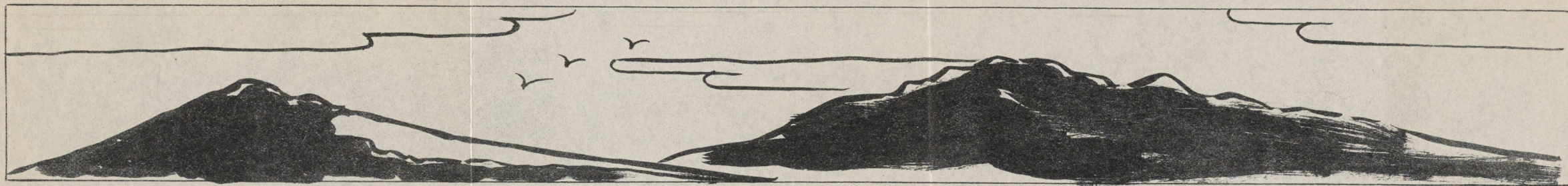
Aug. 1945
Vol. 3, no. 8

67/14
C

ポス
ト
ン
文
藝



八月号



ホストン文藝 八月號 目次

表紙
寫眞(相撲)

重富初枝
小坂芳雄

卷頭言
友に

松原信雄 二

大和民族の起源

野田夏泉 三

漢詩と吟詠に就て

鈴木胡仙 三

七福神

有田百六 六

三偉人の靈感

進藤舟水 六

「我が見し類」を讀む

外川明 六

舞臺に奇蹟を作る人

翠川敏 九

日本の性格

谷川江浦草 五

相撲と日本精神

植野直人 四

雛鷹

重富初枝 四

腹の話

伊藤四郎 四

凡夫と妄語

恒吉盛花 五

寶石の話

新聞惣太郎 五

僕の雜記帳

松原信雄 六

新詩
生活断章

牧さゆり 二

盲聾者

片井溪富子 四

地上の天国

マツイ・シユウスイ 五

自由律俳句會

土屋天眠 六

夏雜詠五人集

徳永佐藤河口 七

マンザナ吟社例會句抄

永瀬勇 二二

木無月歌會詠草集

永瀬勇 一三

去るに臨みて

島原潮風 二五

川添
柳削講座
附シカゴ俳句會

木口春波 三〇

おもかげ

木口春波 三五

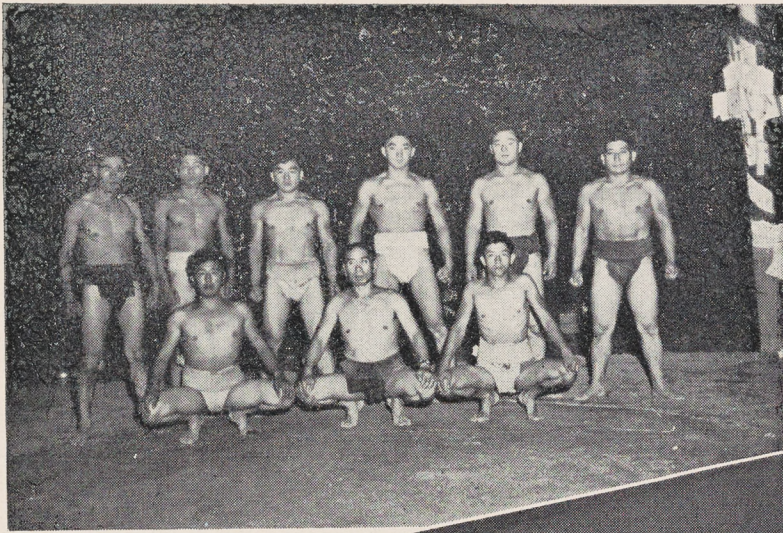
編輯後記

進藤舟水 四

カッ
原板

重富初枝
龍井謹平

SUMO



卷頭言

「吾々はもつと萬人共通の正義とか人道とかを尚ばなければならぬ」——斯う云つて震災直後の東京市民に警鐘を乱打した人は所謂國際主義者ばかりではなかつた。何が故にさうした聲が高かつたか？あの震災を契機として多くの指導者は神話の零圓氣を漂はしてゐた日本の國民性に再檢討の餘地を發見したのであつたが、その一例として當時全國から送られた罹災者慰問品の分配を巡つて捲き起された紛争が姐上に載せられた。あの區或は町の割當は多きに失する。否自區の品は粗悪だ」と云つた論争から配給委員或は他區民を不正義、非人道を行ふ非國民であると互に攢斥し合ひ、遂に山と積まれた慰問品は誰の手にも渡らずに終つたと云ふことが一、二に止らなかつた。自分の考へ方と少しでも違つた考へ方をするものは何でも不正義であり、非人道であり、非國民であると排撃する偏狹な排他主義の横行は震災直後の日本だけではない様である。

ゲーテが「世界の文藝を一つにして」と西東詩集の中に歌ひ「文藝は愛だ理解だ」と呼んでから百年たった。それが假令一つの到達し難い理想であらうとも、文藝が各人の心に他への理解を植えつけ愛を育んで行く一つの役割を與へられてゐることには今も昔も變りはないのである。

(T-I)

友に

「同じ血を領けた仲なればこそ此處に在るのだ。僕は何を爲すべきか、如何に生くべきかを知つてゐる……飽造も、僕は君とそして同胞と生死を共にしよう。」

また、く星を眺めながら、さう君は誓つたのであつた。


今宵もその同じ星はまたゝいてゐるが……君はもう居ない。君は僕や同胞を後にして、去つてしまつた。

だからとて、

僕は思ひたくはない。君がちつぽきな物質慾と利己のため、自分の信念を裏切り、そして友や同胞を捨てたのだとは。

僕は信じた。君は飽造も同じ信念を以て、同胞のため先驅者として、茨の道を切開いてゐてくれるのだと。

松原 信雄



大和民族の起源

野田夏泉

四 人類の移動

人類が創造されてから幾萬年になるか明らかでない。又人種一元説と人種多源説と種々論議されてゐるが此處には略す。然し人類が社會を組織し、國家を形成し、歴史あつて漸く六千年餘に過ぎない。歴史あつて以來、文明の發源地としては、

- 一、チグリス、ユーフレーテス河流域のメソポタミヤ平原
- 二、ナイル河流域のエジプト平原
- 三、黄河を先とし、揚子江流域を後とする支那平原
- 四、インダス、ガンヂス河流域の印度平原

之を要するに河川流域は地味の肥沃と、交通の便利の爲めに天の恵によつて、人類の増加と、居住に適した故であつた。

メソポタミヤ平原の開祖者は「スメリヤ人」で今より六千年位前、世界歴史の第一頁を飾り、後アラビヤから移動して来た「セム」族は其の文明を受け継いで、バビロンの大文化を造り上げたものである。近年バビロンの舊城發掘に

際し、十六辨の菊花紋章のある古瓦や、城壁の一部にも菊花紋章を發見し、日本とバビロンの間に既に、太古から關係あるものとして、考古學者や、人種學者から注目されるやうになった。即ち我が祖神族はメソポタミア平原に遺跡を留めて、人類移動の大勢にかられ、東へ東へと移動したものであると言ふ信念を、學者達に持たすやうになった。

エジプトの文明は「ハム」族の開いたものである。初めメンフ井スを首都として、世界最古の王が建てられた。之も六千年位前の事で、ピラミツドの造られたのは、其後一千年位後の事で、今より凡そ五千年昔の事であつた。

支那の文明は、五六千年前、支那西北方より、黃河流域に沿つて移動して来た漢人種によつて造られ、先住民の「苗族」と呼ぶ土着民族を南方へ驅逐して伏羲氏に至り、遂に北支を占領し、黃帝に至り、黃河流域の平定を完成したものである。揚子江流域經營に着手したのは、伏羲氏より、七八百年後の事で、此の揚子江流域經營に着手前後は、世界の太洪水に悩まされた時代であらふと言はれて居る。

印度文明は、支那やエジプトより遅く、今より四千年位前、中央亞細亞より南下した「アリアン」人種は、印度先住民のドライヴイダ族を追ひ、インダス・ガンデス流域に印度文化を完成したものである。

アツシリヤ、或はヘブライの建國、又は、波斯の統一、ギリシヤ、ローマの隆盛期に達したのは、遂か後世の事である。

五 大和民族の東方移動

メソポタミヤ平原は人口稠密を來たし、自然的、必然的大勢に促がされた人種の移動部隊は、裏海の南岸に沿つて、東へ、東へと進んだ。中央亞細亞の、アフガン北方に着いた頃は、最初出發部隊から、何百年後か、何代目位であつたかも知れないが、アリアン人種が印度カンヂス河を南下し始めた頃であつたであらう。此の東進部隊の子孫等は、アリアン人種との衝突を避ける爲めに、印度には入らず、進路を東北に取り、更に北上して、ウラル、アルタイ山脈を越えて蒙古に入つた頃は、更に何代かの後であつた。其の頃支那國家が漢人種によつて、既に建設されて居た爲め、支那には入らず、更に東進、滿州に入り、朝鮮を経て、更に極く少數の、最も勇氣に満ちた優秀な若干名が海を渡つて、日本の地へ第一歩を印した。之が即ち日本書紀に表れた祖神族であつて、當時日本國は大八洲を形成した後の事であつた。

斯うしてメソポタミヤ平原を出發してから何百年か何千年かになつて居たが、石器時代から銅器時代を経て、鉄器時代へと進歩して居た立派な人種で、衣服も織り、建築も知り、金銀細工、刀劍の鍛冶に長じて居た事は明らかである。凡そ、敗戦者が戦勝者の爲めに征服された場合は、戦勝者の言語を使用するのが常であつて、又道々、國家的組織をなし、團體的組織をなし、其の言語を道々に残して來て居る。此の言語を言語學上では、ウラル、アルタイ系言語と言ひ、又は蒙古語系統とも言はれるが、此の語系は日本より、朝鮮、滿州、蒙古、ハンガリー、土耳其まで、一つのハイウエイのやうに整然と残されて居る。

六 言語學上からの研究

(六)

今日に於ては、日本語と朝鮮語、満州語、蒙古語とは同一とは見られない。然し、多数言語學者の研究によれば、其の原語及び文典系統は整然として同一ださうである。單語々源の一例を擧ぐれば、前記新羅首府、曾紫茂里のモリは集まるの意である。即ち日本語の村はモリから變じ、家の集まりを村と呼び、木の集りを森、物の重なり集りを盛り上る、集合を群と言ふも皆同一意であつて、此の原語に漢字の當字を借用して、村、森、盛、群なる單語は出来てゐる。満州語の山はムルであるが同意であつて土の集合を意味するものである。眺望の廣がる事は韓語ではフル又はブリ、蒙古邊でバル等であるが日本語では張、原（ハラ又はバル）空では晴る、遠方を、はるか、人體で平の所を腹、平地を平等に變じて居るが意は一つである。尾張のハリ、六波羅のハラ、大臺ヶ原のハラ種々の當字を使用して來て居る。交通不便であつた大隅や日向邊では原語の發音が残つて居て、薩摩の爲朝原、大隅の古井原、笠野原、日向の月中原、新田原、六野原、繩瀬原等はハラと呼ばず、バルと呼ぶ。沖繩の與那原のバル皆同一である。蒙古もトルコも朝鮮も王はカンであり、デングスカンのカン、トルコの王をウルカンと呼ぶが矢張りカンは王の意である。朝鮮王は汗岐、汗も岐も王の意、日本の伊邪那岐尊の岐も同意である。

大王を可汗と呼びかは大の意にして、かは又クに通ず。靑土、赤土等とニは土で、クニとは大なる土即ち日本語の國となつてゐる。新羅の國王をコニキシ

と言ふ。コニは即ち國でキシは王である。又單に王の事をキムとも呼ぶが日本語のキミ即ち君はキム^或はキシから轉じて居るものである。其他此のウラル、アルタイ系語を研究すれば、数限りなき同一原語を發見すると言ふ。

ロシヤの言語學者 ボツドネーフ博士は、日本の「てにをは」は蒙古語の格であり、日本語同様に使用し、文法の配列も亦同様であると發表して居る。

ウラヂオストツク東洋語大學の教授、バスターウ井ン博士も右ボツドネーフ説を支持し、同系統國語なる事を明かにして居る。

佛國の言語學の權威者メートル氏は、特に琉球語を研究して、琉球語も亦支那系や南洋系でなく、ウラル・アルタイ系である事を發表した。

帝國大學醫學部の教授であつたベルツ博士の説によれば、東部シベリヤ及び滿州の住民を「ツングース族」と言ひ、西部シベリヤから蒙古へかけての亞細亞人を「ツバス族」と言つたが、此のツバス族は何時の間にか絶滅して、其跡へエニセイ河上流から移住して来て、アルタイ地方及び西南蒙古に分布した種族をアルタイ種族と言つたが、日本人種は此のアルタイ族と同系であると發表して居る。

ツングース族は黒龍江南北から、オホツク海まで住んで居た。勿論滿州族も其の中であるが、支那歴史に表れて居て、度々支那を攻略し、鮮卑、烏桓、契丹などの名稱を附せられてゐる。之は時代時代によつて、支那人の異名したもので、其實いづれも同族ツングースの事を指したものである。

ツングース族は一名ツンフー族とも言はれ、高度の文化を持つた人種であつた事は、支那歴史後漢書の烏桓傳中に記載されて居る。

今日興安嶺の東西より、黒龍江上流邊より發掘される刀劍、玉、石斧、土器、鎧の鍔等は日本内地より發掘されるものに等しいと言ふ。

朝鮮は早く、辰韓、馬韓、辯韓の三韓に分れて居て、後には北に、高句麗、次に新羅、南部に百濟となつたが、高句麗の北即ち今日の平安道から盛京省邊に高麗が在り、其の東に濊、更に其の東に沃沮（今の感鏡道）尚、沃沮の北側に扶餘があつたが、いづれも西北方より移住して来た人種で、之等を總稱して韓人と稱し、風俗、習慣、居住等日本人と似て居る。特に一家に死者のあつた場合、死者を舊居住に残し置いて、新居を造つた古風習など、日本古代の奥津桑戸に似て居り、馬韓の風俗中の田植祭や新嘗祭、さては神前に「まきかき」を用ゆる風習等一致点が多い。

セ ハンガリー人と土耳其人

前述の如く、ウラル・アルタイ系言語は西はハンガリー、土耳其まで同一であるが、ハンガリー及び土耳其は共に其の歴史は新らしい。

ハンガリー人は、容貌、骨格、性質、氣風に於て、非常に日本人と類似して居る。言語系統、文典も勿論同一である。特に姓名の書に於ても、豊臣秀吉はトヨトミ・ヒデヨシと書き、西洋風にヒデヨシ・トヨトミとは書かない。單語の中にも、ハンガリーアン語の「シホ」は塩であり、「サケル」は裂ける事で

ある。之は一例に過ぎないが、深く研究すれば驚くべき多くの同一單語、乃至は同一原語を發見することであらふ。ハンガリヤン人種中には、アジヤ人種の「マジヤール族」が多くを占めて居る所から、アジヤとの交渉が特に多かつた事も思はれる。

支那秦の始皇帝を惱まして、萬里の長城を築かした匈奴^{ヤウド}即ち「フン族」はアルタイ系族であつたが、漢の武帝に至つて西方へ驅逐され、ボルカ河の流域に移住した。其の頃西方からはゲルマン人種、東方よりは蒙古民族の遠征によつて更に難を南方へ避け、アルメニヤ地區に再轉住して居たが、西暦千三百年頃酋長オスマンの蹶起となり、遂に今日の土耳其帝國を築き上げたものである。要するにハンガリーも土耳其も一時東進した民族の一部が時勢に壓せられて、逆轉したものと見られて居る。

八 南方よりの渡來說

以上の如く日本人種異動の跡はメソポタミヤ平原に發し、中央亞細亞からウラル、アルタイ山脈を越へて、蒙古に入り、滿州、朝鮮を経て、樂園日本國へ渡來して來た説は漸次勢力を占めるやうになつたが、今尚、南方系、即ち南部亞細亞系或は、大洋系を主張する學者も尠なくない。

南部亞細亞説とは、印度方面より海岸傳ひに、或は海路により、ビルマ、シヤム、安南に入り更に海岸線を北上し、支那、福建省邊より、日本、朝鮮へと渡來したものであらふと言ふのである。

之等の人種は或る程度容貌、骨格、性情、風俗は日本人に似て居る。特に前

述べた「苗族」は漢人に混はれ、今日に於ては、貴州省南部、廣西省北部に少數、山中生活を營んで居るが、曾ては支那春秋時代には楚國を起して、秦と覇を爭つた事さへある。之等苗族の言語、風俗は印度ネシヤ人に類似し、又日本人のそれにも類似点が多くある。尚南方系人種は好んで文身イレズミをする。我等の祖神は之等文身族を引率して渡來したと主張する。

然し、日本の文身に就いて研究の結果、日本文身の風習の傳つたのは後世の事で、太古に於ては文身の無かつた事が判明した。

又太平洋系派は、船中生活を營み、島から島へ漂泊し、地上生活は四角形の堀立小舎式で、丸木船をよく操縦し、宗教儀式に假面を用ひ、父子襲名の慣例等々を擧げて、南方太平洋系説を主張する。

勿論第一項に記述したる如く、現代の日本人中には南方人種の混入して居る事是否定出來ない。然し之を大和民族の主体をなす祖神一行であると断定する事は出來ない。日本で宗教儀式に假面を使用したのは遙か後世の事であり、父子襲名慣例も徳川時代から後の事であつて問題にならない。

言語に於ても、幾多の馬來系、ポリネシヤン系の混入して居る事も事實であるが、それは只單語のみであつて、秩序ある系統及文法的のものではない。

九 結 論

史を要するに四面海に圍まれ、風光明媚な島國日本國である。島に多種多様な人種は、或は漂泊し、或は移住して今日に於ては甚だ複雑して居るであらふ。然し民族の基礎をなす中堅人種我々の祖神が、最初日本へ渡來した足跡を

伺ふには、幾千年前に於ける亜細亞大陸人種移動の跡を考察しなければならぬ。今から五六千年前に地球上人種大移動の一大潮流のあつた事は學者達の一致する意見である。

五六千年前、メソポタミヤから東進を起した人種の移動部隊は、或者は裏海の南岸に沿つて進み、或者は山の麓を廻り、北に分れ、南に離れ、或は沙漠を迂廻し、其の一部は漢人を脅やかした匈奴、烏桓、鮮卑、契丹、渤海、扶餘、肅慎（シユンシン）となり、肅慎は女眞（ヨシン）となり、遂に支那を占領して清朝を起したの、近世の出来事である。之より先、蒙古、滿州、朝鮮に同種を残して、最も優秀なる少数は日本國へ渡來して、日東帝國を建設したものであると説く學説は優位なる立場にある。

日本祖神族が佩用して居た粧飾品は、バイカル湖並に西藏から産する青琅玕（キョウカン）であり、青琅玕は普通昆侖玉（コンロンギョク）とも稱し、之の寶石で造つた句玉（マコトタマ）や管玉（カンタマ）であつた。三種の神器中の一つなる神寶、八坂瓊勾玉は此の青琅玕である。又バビロンで發掘された、十六瓣菊花紋章、日本内地から發掘される陶棺も小亜細亞邊で用ひられたものと同一なる事、日向、高千穂盆地邊の古墳の構造及び發掘される諸器具よりして、或は我々の祖はメソポタミヤ平原に居住して居たアーケデヤ人種ではなかつたかとまで研究が進められて居る。

若し我々の祖は此のアーケデヤ人種であるとすれば、バビロンの大文化を受け、た優秀な人種であつて、我等は之を誇りとすべきである。（終り）

漢詩と吟詠に就いて

(二)

鈴木胡仙

吟詠の基礎は列子に記せる如く「我が體、心に合し。心、氣に合し。氣、神に合す。」と即ち氣、神に合する。その氣合を以て、一聲毎に魂を打込んで吟詠する所に、詩の生命があるのである。たゞ漫然と聲を出すのが能ではなく、精神修養が相伴ふてこそ、始めて眞の詩の生命が現はれる。故に吟詠は魂の絶叫で、聲は心の表現である。複雑な思想、感情を言ひ現はすために、聲に各種の調子をつける。吟詠が朗讀に優るのは、正しい音聲の変化があるからである。要するに心氣の喚發作用によつて大なる影響を與へ、朗吟といふことがさうした精神力の發揮であつて、そこに出て来るものが美の表現である。即ち美の表現は吾人の思想、感情を訴へるもので、精神力は所謂美の表現である。心の喜びを表現する時、その聲の内容に現はれた明るさと愉快さによつて、言葉が生き／＼して来る。そこで聲の内容は、人格の微光であるから、雑談、演説、詩吟等、悉く聲の内容を重んずるのである。

聲は聲には四段の活用がある。第一に聲の色、第二に聲の力、第三に聲の量、第四には聲の重味である。その聲の色、力及び量の三つは、練習を積みば誰で

も容易に上達するものであるが、聲の重味に至つては、その人格の如何によるので、精神修養の足りない人では到底達し得られない。聲の重味は、聲の大小によるのでなく、全くその氣品によるものであつて、一寸人の話す言葉を聴いても、その人の人格が聞き分けられるものである。如何に大聲叱呼して論じても、更に人を感動させない演説があるのもその爲めである。『アツ』『エツ』の一聲も丹田に満身の氣力をこめ、禪の一喝の如くに全人格の發露でなくてはならぬ。一語一句の中にも、又一聲一呼吸にも『靜山急』の呼吸が大切である。始めは落付てやつたりと出す。之が『靜』で、中頃は堂々山の如く搖ぎなく出す。之が『山』で、末はわだかまりなく結末をつけるのが『急』といふのである。發聲法を研究するには言語による發聲の仕方が最も必要である。

音聲

音聲
音 || 發聲器管 (聲帶) 音聲器
 (鼻腔)

音は聲を伴ひ、又は伴はずに出ることが出来る。『聲』を生じた場合について見ると、『聲』は喉頭で發生し、『聲』を帯びた呼氣は口なり鼻なりを通じて外に吐き出される。そして其の通る時に口又は鼻の中で共鳴を生じて一種の音色を與へられる。音聲は母音による『アイウエオ』の五つと、子音の『ン』と子音による『カサタナ』などの諸音節の頭音で、假名は音節文字を、一字が一音節を代表してゐる。子音だけで音聲を表はす事は出来ない。單に子音は『音』の主要な性質を規定して、『響』の性質を現はしてゐる。

音聲

母音 有聲

子音 有聲 子音 無聲 子音

上記は子音と母音とについて有聲、無聲を區別し、
て参考に示したものである。

聲の性質を人格といふ語に對して聲格といふ。聲格とは聲の本質である。又聲の内容をいへば、聲は肉体の發聲器官によつて機械的に出るばかりでなく、一種の内容的價值があつて、その時の氣分、精神生活が表現される。生きた力が働き、情が含まれて始めて生命がある。之を聲の内容といふのである。

吟詠に就て元來漢詩は、「起、承、轉、結」の四句より構成されてゐるが、吟ずるに當り第一の注意は、起句で起して、承句で承けて、轉句で返して、結句で纏める。之が漢詩構成の順序である。故に詩を吟ずるに、起句を低い聲にて吟じ出し、轉句は高く吟ずる。そこで内容からいへば、轉句は別事のやうな句を述べて、結句にて結末をつける。併しすべてが轉句を高く吟ずるのではなく、詩によつて起句を高く吟じ、轉句を低く吟ずる場合もある。之等は大体平仄により標準を定め、句切りは韻脚によつて確めるものである。

漢詩は二句づゝ相連なつて意味を纏めてゐる。そこで之を吟ずる場合は、二句を三韻節とする。三韻節とは三つに句切つた切り目であつて、一韻節即ち一つの切目にて呼吸する。故に二句に對して三つの呼吸が出来る譯になる。その切目は大体「アイウエオ」の母韻と「ン」に返つた所である。そして節調の揺りのべ、揺りの上下は凡て母韻に返つた處でする。

タイム すべて音聲、聲樂共にタイム、律度 が肝要である。詩吟にしても、

各詩について、正確な吟詠時間が定められてある。故に一つの詩を吟ずるとしても正確な律度でもつてすれば、同流の何人が之を吟ずるも、同じタイムでなければならぬ譯である。詩を習學するには教ゆる人も習ふ人も、同様な律度で一詩を吟ずる様注意すべきである。

漢詩の種類Ⅱ絶句、△五言絶句―一句五字―二十字。△七言絶句―一句七字―二十八字。△第一句、起句、△第二句、承句、△第三句、轉句、△第四句、結句、之を總稱して起承轉結と云ふ。

△律體―(五言、七言) 絶句の承句と轉句の間に對句として四句を加へたるもの。

△古詩―唐以前の詩で、古體詩の畧、(古詩、長詩、樂府、短古)

△今體詩―初唐以降の作。

△一返體―一回吟ずるもの。

△重返體―同一の詩を種々なる形で結句を繰り返し吟ずるのである。王維の

「送元二使安西」の詩の如きもの。

尚ほ附加したきは、五七言律及び絶句は初唐の頃の創作なれば之を唐以前の作と區別して今體詩と稱す。古詩には漢魏六朝時代の作を指して云へるも、後世なほ其の體に倣つて作れるもの(擬古詩)を古詩と稱す。古詩は猶ほ、句に一句四言のものあり、六言のものあり、五言七言は今體と同じである。句数に於て少なきは一首二句、多きは數百句に至るものがある。

「前四頁の天皇の徳を頌しての詩文に「三歳」とあるは「三才」の誤記に付訂正す」



七福神

有田百

去る五月廿四日、第四ステージに於て、琴友會主催中島師匠の豪華な、春期
琴の演奏會が催ふされた。今年正月金澤岩吉氏より師匠に贈呈されたと云ふ、
山根駒雄氏の筆に成る七福神の引幕は、洵によい思ひつきのデザインであつて
頗る好感を受けた。所がこの七福神について問題が起つた。それは七福神は、
福德の神だとは何人も知つてゐるが、それ以上のことは餘り分らない。而もこ
の七神仙を適確に言ひ得る人は、失禮ながら稀れであらう。演奏會の晩、二三
人で、六神まで擧げたが、一神は結局宿題として残された。況んや七神仙個々
の由緒経歴をや。

加藤統政部長は「七福神」を誌上に紹介すれば、益する所が相當あらう。と
注文された。而し七福神に関する参考書はない。僅かに断片的に物された文献
によりて幾分か知ることを得た。且つ不明の箇所は石原慈禎師に教へて戴いた。
従つて、下記の「七福神」は要するにそれ等の記録の轉載に過ぎないことを承
知して頂き度い。

尚ほ石原先生の好意を厚く感謝する次第である。

七福神 (二月初夢) 逸名

波靜龜遊^フ惠方海

七人乗合棹^ヒ蓬萊^ス

辨天音曲神々舞^ヲ

一夜春風入^{ツキ}夢來^ル

○七福神！俗説に福德の神として崇敬せる七人の神は、時代によつて異同があるが、現今にては、大黒天、蛭子三郎（恵比須）、毘沙門天、辨財天女、福録壽、壽老人、布袋和尚をいふのである。一説に、壽老人の代りに、吉祥天又は狸々を加ふ。

七福神は印度、支那、日本の神を聚めたもので、何人の創意によるかは明かでない。又七神仙に限定したのは、仁王般若經の下に、「七難即滅七福即生萬姓安樂帝王歡喜」といふによつたと言はれてゐる。

○七福神詣！新年に七福神の祠を巡拜して、徳福を祈るのであつて、七福参りとも云ふ。東京にては、向島、谷中、山手に七福神がある。

大黒天

印度の摩訶迦羅神で、元々護法の神、戦の神として崇拜せられ、時には大いに忿怒して鬼共を征伐し、或は珍寶、藥餌を

與へて五衆を守るといふ。一轉して飲食の神となり、食堂に安置さるゝことになつた。従つて其の形像の変化も仲々に多い。我が國に傳來して、更に変化を來し、現今にては福德の神として崇拜せらる。

形像！狩衣の如き服を着て、頭巾を冠り、左肩に袋を負ひ、右手に打出の小槌を持ち、米俵の上に立ち又は座す。

惠比須

一名蛭子三郎。夷三郎。伊弉諾、伊弉冉二尊の第一御子であるともいふ。傳説によると、三歳になつても、なほ立ち得ない

ので舟に乗せて海に流したが、遂に攝津ノ國西宮浦に漂着した。今の西宮蛭子神がそれであるといふ。又彦火々出見尊とも、事代主神ともいふ説がある。形像―狩衣、差貫に風折鳥帽子を着て、釣竿と鯛を持つてゐる。

毘沙門天

佛教では四天王「増長、廣目、持國、毘沙門」の一で、身は黄色で忿怒の相を現し、七寶の甲冑を着てゐる。或は

右手を腰にあて、左手に三叉の戟を持ち、又は左手に寶塔を捧げ、右手に鐔を持つ。須彌山の半腹に住んで北方を守護した。福壽増長及び佛法護持の神と言はれてゐる。恒に佛の道場を護りて説法を聞かといふので「多聞」ともいはれてゐる。

辯財天

は「辯才天」とも書く。音楽と辯才を司る。無礙の辯才を有し、佛徳を流布し、壽命を増益し、怨敵退散、財寶満足等の

利益ありと言はれてゐる。形相に二種あつて、一は頭に白蛇を飾れる寶冠を戴き、右手に劔を執り、左手に寶珠を捧げて蓮華に座してゐる。他の一には、八臂にして各々その手には弓、箭、刀、鞘、斧、杵、輪、索を執り、常に一足をあげてゐる。後世に至りて福神とせられ、従つてその形像も変り、二臂にして左膝を立て、坐して琵琶を彈ずる女性となつた。

福祿壽

支那にては、南極星の化身なりとて、南極老人ともいふ。北宗の壽祐年間に現じた道士なりといふ。

形像―短身、長頭にして美髯を有し、杖頭に經卷「人の壽を記す」を結び、

白鶴を伴ふてゐる。

壽^{ジュ}老^{ラウ}人^{ジン}

支那系の人で、長壽を授けるといふ。普通の老人で杖を持ち、玄鹿を伴ふ。玄鹿とは千五百年を経た鹿で、その肉を食すれ

ば、二千歳の壽を得るといふ。

布^ホ袋^{ダイ}和^オ尚^{シヤウ}

支那梁代の禪僧で、明州奉化縣の出、名を契此といひ、常に袋を肩ひ、日用の資金を施與された物を收め、村落

を巡り、小兒と戯れ遊んだといふ。自ら弥勒菩薩の化身といったが、嶽林寺の東廊磐上に端坐して示寂した。

形像一肥満せる身體で、殊に腹部が膨大してゐる。手に軍扇を持ち杖で袋を負ひ、温顔微笑して群童を伴ふ。

○七福神の繪画の配列には左記の二様がある。

○仁王經の七難

毘沙門天
布袋
福祿壽
辨才天
大黒
壽老人
惠比須

惠比須
大黒
辨才天
布袋
壽老人
毘沙門天
福祿壽

天	變	地	異
日月失度難	諸火焚燈難	大地亢陽難	大風數起難
太陽、月が光度を失ふ。	一照燈、焚火難	一大地震動	一火暴風雨
衆星變改難	時節反逆難	四方賊來難	一賊峰起
一天体の異變	一期節不順		

三偉人の靈感

遠藤舟水

三年飛ばず鳴かぬ籠の鳥も漸く砂塵にあきてから、出で、婆娑の空氣を吸つてみると想像とはうつて變つて心が何となく明朗になる。逢ふ和人毎に「デンバーへ来る様に」と迎へてくれる言葉には温情がたつぷりこもつて居る。ロングスピーラの残雪を見るにつけてもデンバーは全く初春の感じがする所だ。傳坡婦人の脛は素敵に白いよ」と誰が言つたらう。それもろそではなかつた。楓の綠葉を通して歩む朝の婦人の曲線美はキヤメラの好題哉だとうれしくなる。

ロツキー山東同胞の爲めには常に一肌ぬいでゐる元老宮本ドクターを訪ふと折柄讀書中にも不拘、今から一つ山へ案内しやうと言はれる、自動車の用意も出來ていざ出發の瞬間ドクターは空を仰いでコリヤ今日は電が降るかも知れんぞと氣遣ふ。朝は快晴だがデンバーの氣候は新來の我々には殆んど思ひも及ばない、深緑の松林を上る途中には五臟六腑に沁み渡る程冷たい銀明水が音もなく湧いて居る。此の山頂にはインデアン退治で有名なバファロービル(ウイリアム

コーデー氏の墓があつて墓前に捧げられた澤山の一仙銅貨は世界何れの國でも
変りない人情美を物語つて居る。其處から道をかへて海拔一萬呎のジニース公
園松樹の傍に車をとめつゝ、山に造詣深いドクターは徐ろに語り出した。

x x x x

アレ、彼處に見えるのがエバンスの高峰だよ、おれは毎年一週間位あの山
の洞窟へ入つて座禪三昧にふけつたものだ。だが面白い事に一萬二千呎位の處
で朝になると丸い眼をしたクインベアが何百となく出て来てね、ブレッツド
などやると直ぐ親しくなるんだ。可愛いものだよ。それが九時になると言合せ
た様にサツと逃げてしまふんだ。矢張り大氣の自然に支配されると思ふね。

その下方には大自然學者のエノーマイル先生が住むと聞いたので訪問し
てみると家だつて屋根なんかありやしない。珍鳥が家中を飛廻はりチツプモ
ンクが先生の肩先で戯れて居るのに平氣で讀書して居られた。又小さい立
札には「たとへ一匹の虫でも殺してくれるな」と書いてあつた。よ地につく程長
い頭髮のマイル先生は喜びの手を差のべて握手されたが、其時どうです、強い
グアイブレーションに打たれたんだよ」と當時を追想してかドクターの入歯
が幽かに動いた。あまりのなつかしさに明るる年も亦尋ねたが時逢しもう故
人となつてしまつたのでドクターは感慨無量、遂に先生を弔ふの英詩を墓
前に掲げて去つたといふことであるが……其英詩を記せば

TRIBUTE TO ENO MILE, GREAT NATURALIST

'Tis theirs to pass with joy and hope,
Whose souls shall ever thrill and fell
Dream of the birthplace and the tomb,
Vision of Rocky Holy Hill.

Why must we meet, why must we part,
Why must we bear this yoke of must,
Without our leave or asked or given,
By tyrant fat on victim thrust?

'Ear never heard, Eye never say
The bliss of those who enter in
My heavenly Kingdom', Eno said,
'Who wield our sorrows and our sin.'

'Say, man, deep learned in the scheme
That orders mysterious sublime,
How come it this was Jesus, that
Was Judas from the birth of time?'

Eno to think that truth can be
Come sit we where the wild flowers grow,
Indeed he know not how to know
The tinkling of the cow-bell!

Gazing upon the snow capped lofty Longs Peake and
sublimity in superlative range of the Rockies that form
the backbone of North American continent and stupendous
gorges stand as like continental divide of both Atlantic
and Pacific Oceans.

No wonder to grow such super-human naturalist among
massive folds of earth tilted skyward by the natural
greatness.

Humble orientalist silently sitting at the shore of
the Summit Lake of Mount Evans.

Gansui. K.M.
1917 a.c.

こういふ強い靈感にうたれたことがまだ二度もあるんだよ……そうですか、ドクターそれは誰ですか、私の好奇心は重ねて尋ねる。

ウ、その一人はセントルイスで逢ったブーカー・デー・ワシントン氏だったよ、此の偉人はつか／＼と傍に進んだと思ふと五分間かたいかたい握手をされた後………曰はく

白人の優越観なんてそりや過去の事だぞこれから有色人種の世の中だその實証は日本人が示してくれたではないか、そこへ行くと黒人種なんぬは一弗あればチキン一羽買つて食つてしまふ實になさけないものだと眼から大粒の涙が黒光りのする頬をつたつて流れた。その時にもウアイ・ブレイションがサツと胸に來たよ。

今一人とは誰ですかとドクターに尋ねる……それはねー故ブライアン先生をホブラスカの邸宅に訪問した時だったんだ。私は逢ふと率直に先生「一體米國の精神とは何ですか」と質問すると大きな聲で「米國の精神か、今はないぞッ」と答へられて握手してくれたがどうです其時にも非常な靈感にうたれたんだよ、又差延べられた先生の手の大きかったことも今は記憶の種だとドクターの入齒は再びかすかに動いた。

隨^口想 我が見し頬^口を讀む

外川 明

今迄は罰もあたらぬ晝寝かな。

一茶

勿體ないとは感じながらも、このポストンの眞夏の炎暑には打勝てずに、
毎日大した仕事もせず、晝寝をして暮してゐる私の懶惰な身心を、突然、青嵐
の如くゆすぶつたものがある。外ではない、ツールレーキの鉄柵社から送り届
けられた加川文一氏の隨筆集『我が見し頬』である。

不自由な戦時の收容所内では、これ以上のものは望めない立派な装幀であり、
美しくよく揃つた鉄筆活字である。外見はさて置き、内容であるところの、廿
一篇の隨筆と十四篇の詩であるが、その何れもが彼の深く／＼掘り下げた魂の
泉から滾々として流れ出した清水であつて、渴いた私の心の咽喉を、甘露の如
く潤してくれる。

彼を加川氏と呼ぶことさへ、こそばゆさを感じる程、私にとってはお親愛なる
詩人加川文一であり、呼寄せ青年といふ同じ境遇の下に、廿数年間同じやうに
働きながら詩に親しんで来た僕の加川君である。生活の場所と、職業との異り

が、飲食談笑を共にする機會を多くは與へてくれなかつたが、そして手紙もはげしく交はしはしなかつたが、邦字新聞や雜誌に發表された彼の詩も文章も、一つ残らず讀み、そして切抜き帖に蒐めて來た私である。

『私達の消えゆく足音を、私達の踏み出す足音で破らう』かうした強い意志で、冷い現實を生き抜かうとしてゐた十四五年以前の彼に、私はどれだけ力づけられたか知れなかつた。そしてその頃から是非共彼に日本語の詩集を出させたい（彼は英語の詩集を出したことがある）と希ひつゞけて來た私である。その私の永い間の宿望が、思ふよりぬこの收容所内で實現したので、私は理窟より感情の方が先に走つて嬉しくてたまらるのである。

さて、彼が何故に「我が見し頬」といふ一見解り難いタイトルを用ひたかについて、それを説明する彼の『卷末のことば』を左に紹介しやう。

『詩を通じて、断片的な文章を通じて、私がこれまで見て來たものは、部分であり、全體の『かけら』でしかない。けれど、それは私にとつては人懐っこい部分であり、謂はゞ人間の、生活の、また自然の、頬であつた。それらはいつちも優しい頬であつた。哀しく匂はしい頬であつた。名も知れぬ神に向つてゐる頬であり、闇に反かに返ぶ頬でもあつた。遠くから、近くから、それらの頬は私のこころを温めてくれ、私はそれらに呼びかけつゝ、また呼びかけられつゝ、生きゆく日の信賴を深めてきた。私の貪しい詩と隨筆をあつめた、此の小集を

「我が見し類」と名づけたのはそのやうな意味からである。さゝやかな本ではあるが、私と同じやうに生き、同じやうないのちの日を経験してきた人がひとりでもあつて、この本のどこかに生きてゆくものの同じおろかな惱みとよろこびを見つけ出し、そこに心の温味を寄せて貰ふことが出来れば私はそれで満足である。」

真剣、謙虚な彼のこの言葉に心を打たれるのは私一人だけではないと思ふ。

彼はこの集の詩も隨筆も全體の『かけら』でしかないと云つてゐるが、私は彼のその「かけら」を通じて、廿数年間一筋に歩み進んで来た彼の全體を知ることが出来る。彼の『かけら』こそは宇宙の全體につながるかけらである。

彼にも暗中摸索時代はあつたであらう。そして可弱い自己を叩き壊して、ひたひた危険な時もあつたであらう。然し、如何なる煩悶苦惱の中に在つても、眞の自己を見失はず、容易に宗教と妥協もせず、眞理を探索して進んで来た彼は、遂に見出す可きものを見出し、收穫すべきものを收穫したのである。

何れの頁からもしきかへす詩人加川文一の個性の閃きは、實に堂々たる一家の風格を備へて居り、彼のこの集の隨筆も詩も完成されたものであると私は言ひ切ることに躊躇しない。

『恐れずに自己を直視し得る人によつてのみキャンブも見られなければならぬ。だらしないキャンブ生活と戦ふとは、自分自身とたたかふことでなければ

ばならない。歴史のより大きい現實は、私たちの一人々々に今そのたたかひを強ひてゐるのだけれど、私たちはそれに未だ氣がつかないのだ。隨筆『ギヤロン壕』の中の彼の言葉は、私たちに深い自己反省をうながしてくれる。

彼が謂ふところの見失つてはならない自己とは、たゞ自己の爲の自己ではない。普通の人々が思つてゐるところの平面的自己ではない。廣さと高さと共に、普通の人々が思つてゐるところの立體的自己であり、個から無限に、個から永遠に、つらなり生きてゆくところの實在の自己である。であればこそ彼は、セザンヌやルノアの畫の中に、リルケの詩の中に、在米同胞の詩歌俳句の中にも、埃だらけのキヤンプロ生活の中にも、無名の一莖の花の中にも、自己の實相を見出すことを忘れないのである。

土から掘り出したまゝの自己を、煩惱から生れた自己を、彼は不斷の努力と苦行練磨によつて、神性の高きにまで引上げて來てゐる。この境地こそ宗教家、藝術家の區別なく、常に渴求して已まない境地であらう。

彼の詩と文章を裏づけしてゐる厚みには、多量に西洋のものが含まれてゐると思ふが、西洋のものと謂ひ東洋のものと謂ふも、歸するところは大した異りはなく、彼が『つまらぬもの』の中にも探出さうとしてゐるものは、俳聖芭蕉の俳句の底を貫き流れてゐる『わびしさとまこと』と同じものではないだらうか。彼は隨筆『セザンヌ』の中に左の如く書いてゐる。

『實にいつ見てもセザンヌの作品が我々を強くうつのは、藝術のためには微塵も自己をあまやかすことを許さず、つねに己れを鞭うち鞭うち、最後まで彼がもとめやまなかつたものが、永遠の寂しい光りとなつて彼の繪のなかに追いつめられてゐるのを我々は見のがすことができないからである。まことに沁々とした光である。それはセザンヌが、自己の心を碎いて得たところの、根限りの力で、じり／＼と追つめた天地の光だといふ氣がする。』

私は右の彼の文章中のセザンヌの所に加川文一を置き換へ、繪の所を詩と書き直して、そのまゝ彼の『我が見し類』の批評とし、感想ともしたい。

齡漸く不惑、愈々圓熟して来た彼の思想を、詩に隨筆に綴つて、今後益々盛んに發表してくれることを私は切に希望する。彼の言葉を借りて言へば、私などは『よろめき』ながら、漸くあふなつかしい歩みを續けて来たのであつて、親友彼の雄々しくも振りかざして進みゆく思想の松明は、常に私の前途を明る照してくれたのであり、今後もさうであらうことを信ずるのである。

『氣むつかしき吾と知るゆゑ氣をつかふ妻も夜更けて今は寝ねたり』と詠ひ、陰氣なものの翳りで溢り勝ちな私』と自認してゐる彼ではあるが、彼の胸底にはルノアの畫の如うな溫みが秘めてあるに違ひない。私はこの本の中でも一番好きな『海は光れり』の詩をもう一度讀みかへし、彼等夫婦の限りなき睦しさを祈つて、この拙い稿のペンを擱くことにする。

新時代に奇蹟を作る人

(ブロウドウエイ物語の一つ)
ノルマンベルゲツズのこと

平川 敏

第一次世界大戦の前兆が 漸く表面に現はれ始めた頃であつた。ペンシルヴァニア州東部の或る田舎で農園を所有して居た若い夫婦は 明日の日を思ひ煩ふ程 途方に暮れてゐた。獨乙から渡つてきた両親が 粒々^{ツチ}辛苦^{シク}の果に生活の糧^{カチ}として遺して逝つた農園が 知らない間に他人の手に移り 追出しの豫告を受取らされたからであつた。

夫ノルマンは 生來 農園に立つ人間には出来てゐなかつたので「斯かる不幸に見舞はれることになつたのであらう。無理もない。考へて見れば 餘暇^{ヒマ}さへあれば ブラツシを弄^{イジ}つてゐたではないか——」今更ながら 理解ある妻は迷懷させられてゐた。

「とにかく 何んとかしなけれはならない」と云ふので 新しい持主に暫時^{シバシ}の猶豫を貫ふことにした。「別に専攻の學問を修めた譯ではないし 曾て 此の土

地を出て 附近のマイニンゲタウンにも行かなかつた自分達ではなかつたか？
 田園の人間でないならば 勢ひ都會に移らなければならぬ。然し さて何處
 へ……… 思へば 一寸先は闇となつた。

茲に生くる一縷の望みがあつた。それこそは本當に一か八かの賭け事——
 オット・エツチ・カーン 賤團が募集する無名藝術家補助資金に應ずるの途であつた
 のだ。幸にも生命^{イ・チ}にかけて送つた圖案が賤團委員達の鑑識^{メ・ガ・ネ}に適つたのであらう。
 總て その年の夏も過ぎ ペンシルヴァニア平原も秋の色に塗り変へられや
 うとする時 狂喜して手の舞ひ足の置く所を知らない夫婦の前に金一千弗也が
 届けられたのであつた。

斯くして ゲツズ夫妻は 次ぎに どんなコースを取つたらうか？

x

x

大紐育^{ニュー・ヨーク}は マンハッタン ブルックリン クォーインズ ブロンクス リツチ
 モンド の各區からなつてゐるが 俗に世人が云ふニエウヨーク市とはマンハ
 ッタンのことである。

イースト(東) ハドソン(西) ハーレム(北) 三流の河と 大西洋(南) とに圍ま
 れたマンハッタンは長さ二十五哩 巾一哩半ばの島に過ぎない。

全島一塊りの岩石 従つて公園には大きな樹木が生えてゐない。地質學者の
 説によると地下五哩にも及んでゐるとか？ 短時日の間に高いビルが建てられ

るのも其れが爲である。

曾て 和蘭人はインディアンからウヰスキイ一罎で買つたとも云ふ。現在のマンハツタンは 隅から隅まで 土一升金一升 名實共に世界文化の中心地となつて了つた。

詩人ホヰツトマンがうたつた「百萬の足を持つマンハツタン——」の情意は冬が訪れなければ味へない。生粋の紐育つ児は夏は外に島を留守にするからだ。セントラルパークの木の葉が色も変へず音もなく落ちる頃は 既に秋は半^{ナカ}ば 五十九街と三十八街とに挟まれたブロードウェイを中心とする大^{グレート}白光街は冬の夜の光を一入^{シラ}華かに増す。芝居季節の始つたことの報せである。

それは 新聞記者であり作家でもあるデモン・ランヨンが よく筆にする「嗚呼ブロードウェイがブロードウェイなりし頃」エディ・カンターがズヰツグフェルドフォリスに出てゐた頃。ホール・ホワイトマンが未だカフエ・ローヤルでデインナー・ミエウヂツクを奏^{ウタ}でゝゐた頃であつた。

マンハツタンの中心 タイムスクエアへ三十分以内に到達し得る人の波は約一千萬 大白光街に軒を並べる劇場とホールは二百 毎夜三十萬の觀劇家が押寄せたブロードウェイ全盛時代であつた。

紐育は流石に大きく變つてゐる。行つて見て二度吃驚する程食しい建物ではあるが 世界的に有名な劇場で 白光街とは懸離^{ハズレ}れた邊鄙^{ヘンビ}な場末に立つ小屋が

二つある。グリニツチヴネレーヂのプロビンスタウン座とグラント街はイーストエンド近くのネバフツド・プレイハウスと。

冬が来ればマンハツタンに粉雪が降る。グラントと三街で高架鉄を下りた一見田舎出と誰の目をも惹く若夫婦が、身に餘る手荷物を抱へ、とぼ／＼イーストエンド向つて歩いて行つた。本篇の主人公ゲツズ夫妻のお上り姿であつたのだ。白光街の目貫きな場所にあるものとばかり——の豫想に裏切られ、訝しく思ひながらも

ネバフツド・プレイハウスはイーストリバー近く、しよんぼり立つてゐる。座主は風変りのスチルソン姉妹。ドラマリーグが補ふが興行は間違ひなくいつも欲損、算盤の桁を外して新作を試演するからである。然し何年か経ては必ず白光街で受けるので、劇壇の尖端を走る風変りな座主は其の都度それで満足してゐた。

ゲツズが先づスチルソン姉妹の下に足を運んだと云ふ事實そのものが、彼が先覺者であつた点を證明して餘りあるが、其れは後に判つたことで、其の日は如何に取扱はれたらうか？

流石に変物の姉妹も辟易した。餘りにも風采が汚なかつたからだ。「あなた方の仕事に憧憬を抱いて遙々やつて参りました。手當は問ひません。どうか背景

と装置を作らせて下さい。若し其れも適ひませぬならば、せめてジヤニターにでも「——」！。果は取附く隙間もなかつた。あつさり断られたゲツズは泣き出しさうな妻の手を引いて雪のグランド街へと出た。廣い紐育ではあるが、當もない。空腹に懷中無一文——

斯くして、生きんが爲に働くのではなく、働かんが爲に生きる世智辛い紐育生活の第一歩をゲツズは踏みしめたのであつた。

間もなく有附いたのが酒場のポーター。若し、その酒場が普通の酒場であつたとしたならば、「奇蹟を作る人」は生れなかつたに相違ない。彼も確かに好運児であつたのだ。酒場は一流人の寄るクラブの中にあつて、誰ふとなく評判になつた。「オイ、今度のポーターは少し變つてると思つたら、繪書きださうだよ」と云ふ譯で、酒場に貼詰められた鏡に、ソウプで肖像を所望されるやうになつた。氣に入つた酔客は惜氣もなくチツプを投げる日が續いて行つた。

オット・エツチ・カーン（故人）はモルガンの向ふを張るウォル街のビツクシヤットであると同時に、紐育交響樂協會、メトロポリタンオペラ會社の専務を兼ねる藝術愛好家でもあつて、米國で最もと云ふよりは不可能に近い程面會するのに至難な人であつたと云はれてゐる。

其のカーン氏に稀らしくも閑な午後が偶然にも訪れたのである。ゲツズが其れとは知らないで面會に行つた。無論豫約なんかある筈がなかつた。此處にも

好運が彼を待構へてゐたことを見逃せない。

聊か好奇心が手傳つて會つたと云ふものゝ、禮を速べられ吃驚したのがカーン氏であつた。何故ならば、今までそれこそ數へられない程、無名の画家音楽家を補助したことはあつても、誰一人として返金しに來た者はなかつたからだ。直ちに秘書が呼ばれ調査させて見ると、ノルマン・ベル・ゲツズに金一千弗也の補助金貸與の書類が出て來た。

紐育へ來てからの苦しい體驗談を聞き了つたカーン氏は、「それでなんですか、あなたがお志しになつてをられる方の仕事は？、若しお差支へなければ明日にでも此處へ届けて置きなさい。拜見しませうから」。

隠れた不世出の天才、ノルマン・ベル・ゲツズが認められ、メトロポリタンオペラの舞臺裝置を塗り変へ、ブロードウェイに煮え返る程のセンセーシヨンを捲き起したのは、次ぎの季節であつた。

一躍劇界の寵児となつたゲツズは、單に裝置家としてばかりではなく、演出にも乗り出し、新作發表毎に破れるやうな喝采を博して行つた。

ネバフツドプレイハウスのドラマリーグは風変りな存在である。一流の劇作家かゞ居るかと思へば、好奇心に胸を焦す大向ふ連もゐた。月に一回、日を定めて劇界へ俳優、監督、裝置、照明、劇作、等、各方面知名の士を招いて講演して貰ふことになつてゐた。

ノルマン・ベル・ゲツズが膝^{ヒザ}を七重に折られて招かれ 一場の講演を行ふと發表された時は 非會員も多数申込んだので當夜は舞臺裏までも人で埋める騒ぎとなった。司會者はスチルソン嬢 紹介されたゲツズが立ち上ると 場内は破れるばかりの喝采 聴衆は固唾^{カクダ}を飲んで耳を澄してゐた。

開口一番「實は 私は今から十年前 それは／＼ 寒い冬の日で――」

これから先きは書く必要もあるまい。讀者の判断に委すことにしやうと思ふ。寫實時代^{リアリズム}の次ぎに來る物は何か? くら説き起し「モスコウ・ハビマ劇場の例を引き 獨乙に發祥した構成派の舞臺裝置に所感を述べ 未來派の新しい運動に對し結論を下して」降壇するに至つたまで 無我夢中で聞いて居た司會者の蛤^{カキ}のやうに空け放しになつた口の大きさは紐育劇壇のエピソートとして今でも遺^ユされてゐる。

呆氣^{アツ}に取られた聴衆を後にグラント街を出たゲツズは如何^ドんな靈感に接したううか? 寒い冬の粉雪は降つてゐない。然し 餘りにもみじめであつたあの日の姿ではなかつたか? 今はパーク街のペントハウスに住む身であるとは云へ 此れで可いのであらうか? 冷水を浴せられたやうにゲツズは頭の天邊から火柱が突き貫けて行くかとも思はれる感じに迫られて了つた。

イーストエンドの夏の夜は蒸し苦しい。身の置き處ない歐州移民の惡童共がサイドオークを右往左走する情景に接して「デッドエンド」の舞臺劇を構想

する契機を捉へたのであると云ふ。

ノルマン・ベル・ゲッツが「奇蹟を作る人」と稱されるやうになつたのは一九三九年 紐育で開催された萬國大博覧會で「月への旅行」を造築した頃からであるらしい。

x

x

(讀者に一言) 何か變つた物と思つて書いたのが此の拙篇であります。時節柄頭が纏らず甚だ拙いものとなりました。悪しからず御諒承を乞ふて置きます。材料は全部直ぐに聞いた談。記憶を辿つて書き綴りました。

ノルマン・ベル・ゲッツの仕事で讀者が御存知と思ふのは「デッドエンド」の映画化でありませう。あのセツトはサミュエル・ゴールドウインに請われ、業々聖林に来て自身作つたものと云ひます。

それにも増して讀者が熟知されて居られるゲッツの仕事があります。雑誌「ライフ」によく眞物だか、ミホテユアだか一見判らない歐洲や南太平洋地方の寫真が載つてゐるでせう——あれはゲッツ氏の作つた仕事であります。

x

x

曾て、ネバフツドプレイハウスで最も夙く「イブセン」を紹介した花形クリミヤ半島ヤルタで産れた北歐の名女優アーラ・ナジモバが孤り淋しく聖林のカテーヂで逝つたと云ふ訃を聞くの日——

(完)

日本乃性格

谷川江浦草



日本に来てゐた或る支那留學生に何故日本に勉強に來るのかと訊ねて見た。すると、その返事がなみ／＼ふるつてゐる。吾國では貴國への留學を鍍金留學と呼び歐米留學を純金留學と云つてゐる——つまり歐米へ留學するに越したことはないがそれには費用も嵩みおいそれとはゆかないから近くもあれば金も比較的かゝらない日本へ來る。さうすれば直接歐米へ留學せずとも日本は歐米學問の直輸入國であるから何でも好みのまゝに勉強出来る。但し支那へ歸れば本場の歐米で勉強したのではないから鍍金だと云ふのださうである。歐米學問の直輸入國——一寸馬鹿にされたやうな氣もしないではなかつたが先生シンセンなみ／＼味なことを云ふと面白く感じたことであつた。

吾々が日本の文化とか性格とかを考へる時に先づ頭に浮ぶことはこの日本人の模倣性といふことである。日本人は模倣の國民だと自他ともに許してゐるだけに明治維新以後の泰西文物の輸入は勿論のこと歴史を遡つても判る通り佛教傳來以來の支那模倣文化は實にめざましい限りであつた。模倣するとなればト

コトンまで模倣すると云つた工合に日本の他文化の受け入れ方は多くの場合可なり無批判的であつたやうに思はれる。この点支那などは日本と交通するやうになつても殆ど日本の文物を入れてゐない。刀劍とか美術工藝品とか支那のものより立派なものが日本にあることを知つてゐても、彼等はその製法などを真似て見やうとしなかつた。その理由の穿鑿は今こゝに直接の関係がないから省略するが十六世紀の中葉日本にやつて來たフランシスコ・ザビエーが日本を基督教化するには先づ支那から始めねばならない、支那の云ふことなら日本は何でも聽従するだらうなど、本國へ報告してゐるのを見ても日本の過去の支那模倣は思ひ半ばに過ぎやう。

かう云つて行くと日本の文化は支那の追隨文化で何らの獨自性もなかつたやうに思へるかも知れないが、それは事實に反した謬論であると云ふことを私は茲に言ひたいのである。「アジヤは一つである」とか「東洋文化」と云ふ言葉などで日本の文化を支那文化と共通なものであるかの如き意味を持たせやうとすることがしばしばであるが、それが政治的な願望を以つて語られるときには又別個の問題として取扱はれる可能性があつても文化的に云へば以上のことは餘り意味をなさない様に思はれる。換言すれば日本位ひ多く外國の文物を受け入れ又日本位ひそれに依つて國民の本質を変ぜられなかつた國はないのである。如何に支那文化を無批判に輸入したときでもそれが日本の國民性にピツたりしな

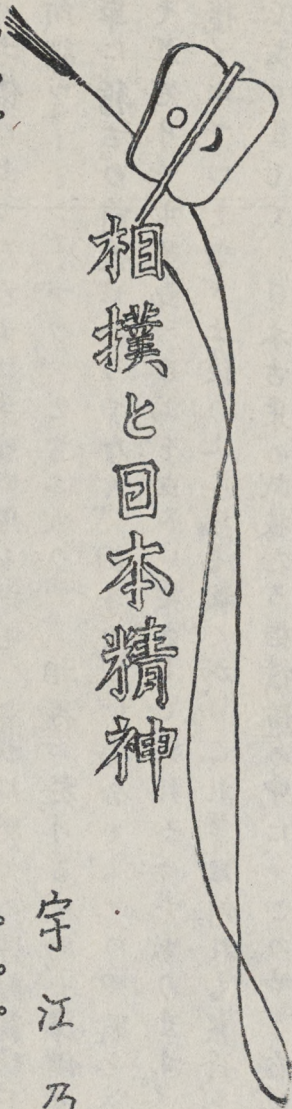
い限り國內には入り得なかつた。卑近な例をとると後宮に三千の美姬を蓄へることゝか宜官の制度或は又鴉片を吸ふ習慣など兎角人間の弱点として耽溺し易き之等のものが日本に入り得なかつたことは注目すべきことである。

日本の文化に最も影響を與へたものとして考へられてゐる支那思想は佛教思想及び儒教の思想であることには何人たりとも異存はないであらう。之等の思想が日本に入つたのは單なる知識としてであつて本當の信仰或は眞の實踐道徳としては程遠いものがあつた。佛教に就て去つても一般にはたゞ「文化の教養としての宗教」であるか「ご利益のための迷信」でしかなく、儒教に於ては文字通り惠まれた一階級の「身の飾り」で日本人の生活に強く根を下したものはなかつた。唐學仕こみの教學や戒律としての佛教が日本人の生活に飲くべからざる精神の糧となるまでには法然、親鸞或は日蓮と云つた卓越せる天才的日本人宗教家を要したし、それに依つて支那的な思想とは何等關係なき道が出来上つて仕舞つたのである。儒教は銜學的江戸儒者に依つて國民に無上の權威として強制されたにも拘らず國民は全然本來の儒教精神とは異つた日本人獨特の受け入れ方をして今日に及んでゐる。

武士道は禪宗によつて形成されたものであり儒教によつて完成されたものであると云ふ説は殆ど定評となつてゐる。然乍らそれも事實と相異する点がある様に思はれる。第一武士道は何時頃にほゞ成立つたかと云ふことである。勿論

何時頃と明確に指摘することは出来ないが源義家の安倍貞任、宗任に對してとつた態度などは一つの武士道精神の現れでもあるし源平時代にはもう武士道と云つたものが確立されてゐた。榮西が宋より老莊の下地を持つた禪を傳へたのは其後の鎌倉時代であつたしその禪が入つてからも大多數の武士は禪とは何の関係もなかつた。禪が日本文化に與へた影響は寧ろ文人とか茶人とかの上に見られるのであつて、武士が彼等の道義感によつて正々堂々と名乗りをあげて戦ひ卑怯を恥ぢ自分の名を惜んで負けると決つた戦ひにも敵に後を見せなかつたのは何ら禪の修業とは関係なかつたのである。彼ら武士の道徳は心理的にはその實生活である戦場の體驗より生死を念としない精神が生じ、社會的には主従の關係が世襲であるところにその家名を惜むと云ふことも生じて來るのである。但し武士の修業と禪家の修業とが一面相通する点より一部武士が參禪したことは勿論である。又儒教に關しては山鹿素行の武士道論もあるが、もと／＼林語堂も云ふ如く支那に於ては人間は國家より偉大且つ重要併し家族より離れては人間は現實的存在ではないと考へられるのであるから親子は一世、夫婦は二世、主従は三世と云つた武士の思想とは相容れない。之も單なる平和時の知識としての武士道論で一般武士とは餘り關係ない事であつた。

とまれ、文化は出來たものであつて作られるものではない。一つの文化が形成されるには又それだけの理由があるのであつて、そこでは何らの人爲的働きも意味をなさないと云ふことを茲に云へば足りるのである。(終)



相撲と日本精神

宇江乃生

すまふを相撲と書き、角力とも書いてあるが、一寸すまふといふ言葉は外来語なのか、それとも他に何か謂れ因縁でもあるのかな、といった疑問を自分は多年抱いた時代もあった。其の時分にはすまふといふ言葉は多分支那あたりからでも渡来した外来語ででもあるのかな、といった極めて漫然とした考へ方を持つてゐたのだった。ところが先年ふとした機會に或る相撲雑誌から偶然にもすまふといふ言葉のオリジンがわかつた。

つまりすまふといふ言葉はすまひから轉じたものだといはれ、すまひとは競ふといふ意味の古語であるとの事です。

して見ると相撲は餘程太古から日本に發達して來た特有の力技であるといふことが言へると思ひます。

素裸で而も素手で勝敗を自己の持つ體力で決しやうとする、その形式を見ても想像されるやうに、相撲の起原は人間の極く原始時代から傳はつて來たやうに見受けられます。日本に於ける起原は何時であつたかは、はつきり致しませんが、神皇以前健甕雷命と健甕名方命が出雲の伊那佐の小濱で相撲を取られたと云ふ歴史的傳説を以て元祖と傳へる説もありますが、しかし其の當時は今日

の相撲と云ふよりは、むしろ力比べに似たものであつたやうに見受けられます。然し一般には、後年歴史時代に入つて垂仁天皇の御代に、あの有名な野見宿禰と當麻蹴速の相撲をもつて始めとしてゐる節があるが、此の方がたしかであるやうに思はれます。

それから後相撲は段々と進歩發達して節會相撲として朝廷の御儀となり、更に降つて武人間の武技の一つとして歡迎されるに到り、漸次大衆性を帯びて民衆の間に入り込んで體育的武技となつて来た。

徳川時代の初期には所謂今日の歡進相撲といふ形式が出来上つたのです。

かうして相撲は時代々々の姿の変遷で、消長こそはあつたが、體育として國民的に親しみを加へつゝ、現在に及んで來ました。其の科學的研究が加へられ、益々日本獨特の國技として名實共に完全なものが出来上り、現在に至つたのであります。

相撲と日本精神

土俵に上つた力士は先づ四股を踏む。これは總ての運動競技にもあるやうに所謂ウォーミング・アップと言ふもので、相撲に於ける補助、準備運動であります。單に稽古の前後ばかりでなく、相手のない場合でも此の四股を踏むこと自體がそれだけでも運動の目的を立派に果さして呉れるのであります。四股を踏んだ後で水で口を漱ぎ土俵の上に塩を撒くが、これ等は何れも潔斎を意味するものであります。日本古來の武技たる相撲道の中に、このやうな嚴肅なる禮儀と

尊嚴性を含んで居ることは自分を此の上なく喜ばして呉れると常に感じて居ります。

この様に相撲が日本精神の要素を多分に含んでゐることは世界的に誇り得るもので、相撲はもとよりのこと柔道、剣道亦然りであります。

横綱の別名を日の下開山と言ひますが、實に横綱程尊嚴性と權威とを深刻に表現するものはないと思ひます。だから歴代の横綱は其の權威を失はないやうに凡ゆる努力を拂つて來て居ります。

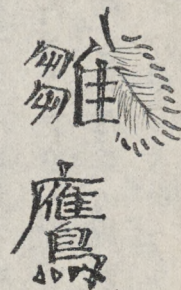
往年の強力士太刀山の如き人が幾場所か不敗のまゝで進んで來たのであるが、新進力士柘木山に破れて土付くや横綱の權威の前に泣いたといふ話で、此の一番で角界から引退を決意したと云はれて居ります。

又最近では現世の名横綱双葉山が昭和十四年の夏場所に四敗した時、彼は心中深く横綱の權威の前に苦しみ、苦悶の結果郷里の寺に参籠して自信力の恢復に努力しました。

斯くして歴代の横綱が横綱保持に腐心したことは外來スポーツでは到底味へぬ点で、これ等から見ても相撲が日本精神を充分に含んでゐるといふことが出来ると思ひます。

自分は常々考へるのであるが、相撲は裸一貫で何等の要具も身につける事なく、體力、精神力を充分に錬磨し得るのでありますから、總ての角度から見て素朴であり、而も男性美の極致であるこの相撲を、此の際一般に對して奨励すべき必要があるのではなからうかと信ずる者であります。

(終)



重 富 初 枝

四月初旬の或る朝オフィスに出勤すると、私の机の上で紙箱に入れられた二羽の毛のぶよ／＼生えた生き物が間断なくピー／＼と鳴き續けて居ました。鳴き聲から判断するとどうやら鳥類らしい。生れてまだ日も浅そうに見えるのに嘴巴かり目立って鋭い。ひよつとすると馳鳥の子かも知れない。と色々と自分勝手手の觀察を續けて居たら鳥の持主の松原さんが入って來られました。

「昨日山から捕って來たんだが、何も食べないからオフィスに持って來たらどうにかなるだらうと思つて……………」誰か隣のメスでミートを貰つて來て食べさせて呉れない？ 水も飲ませないといけないだらうな。」

と松原さんは御自分には扱ひ兼ねる御様子でした。

スポンに盛られた水や、肉の小片を喜んで食べてゐるのを見てゐると、急に此のベビー鳥が飼つて見たくなりました。その夜一晚お預りする約束でうちに連れて歸り、とう／＼小さい方を私が戴くことにしました。三羽のひよこのうち一番大きいのは松本さん、中のは松原さん、そして一番小さいのが私にと、

三羽のきようだいは別れ／＼になりました。

「多分鷹だらう、或は鷲の子かも知れない。」

といふ松原さんの主張に對して、

「鷹は鷹でも、それや馬糞鷹言ふて鷹の中でも一番屑だよ。」

とおつしやる加藤さんのお言葉の方が眞實らしく思はれましたが、その何れであらうとも一人前の鳥にしてやりたいのが私の望みでした。

最初はメスから貰つたミートや魚を小さく切つて與へて居ましたが、そのうち父が薪の中に潜んでゐる虫や、軒下の蜂の巢の幼虫を食べさせるとその方が好物らしく、以後餌をやる事は父の役目になりました。此の頃では蛙、鼠、小鳥、川魚等が常食でこれも到底私なぞの手には負へません。近所のいたづら兎等がいつも心懸けてくれてゐると見え、ばちんこで打つた小鳥、川の端で生捕りにした鮎鼠の子などお土産にぶら下げて来てくれます。鷹を連れて来た當時、「今のうちは蛙で間に合つても大きくなつたら兎一匹位食べる様になるだらうが、どうするの？」

などゝ心配してゐた母が此の頃では一番の愛鷹家になつたらしく、見物に来る人々に誰よりも愛想よく應對してゐます。

うちの鷹は三羽のうちで一番小さく温和しいので雌のつもりで飼つてゐます。私は「ジル」と命名したのですが、餘り父の氣にはいらならしいのです。父

は「隼」とか「神風」とかつけたらしいのです。

うちに来た頃のジルの目は白眼の全然ない濃い、青色で、そのまま取って指環にでも造つてみたい様な美しさでした。成長するにつれて灰色の部分が見れ、青眼は段々小さく中に包まれて来ました。灰色になつた眼は底まで透き通つてその鋭さを現して来ました。夜になると一層冴えて、晝と変らない働きを見せる様です。

白い生毛の上に漸く羽毛が生え始めた頃、まだ歩くことを知らないジルが、父の料理してゐる蛙の傍まで歩いて来た時には、皆で拍手を送りました。

子供等はジルの圓に集つてゐました。その中の一人は両手を擴げて高くジャンプしてゐるのです。別の一人が又ジャンプして見せました。そして「Come on, Jill, Jump!」とジルに飛び方を教へようと、激励するのです。親鳥を持たないジルは歩く事も飛ぶ事も自ら想像してそれを試みなければならぬ。親鳥はどうして飛ぶ事を教へるのだらうかと考へました。私はジルの抱へて両手を離して見ました。ジルは羽をばたくさせ乍らローンの上にふわりと落ちました。それを繰り返してゐるうちにジルはローンの上を元氣な足取で歩く様になり、吹いて来る風に乗つて翼を擴げ、一寸ばかりジャンプするのです。飛んでゐるジルは愉快そうでした。見てゐる私達も愉しくなり、ベンチに腰かけてジルの行動に見惚れるのです。ジルはローンの上から勢よくベンチの上迄飛び上つて来ました。父の肩に乗り、今度は頭の上に上つて残り少い頭髪を嘴

で走り始めました。父は慌てゝ足を掴んで下しました。

翌日ジルはベンチの上から隣の杉田さんの庇の上まで一息に飛んで皆を驚かせました。飛んだ後も羽を擴げたまんま、くる／＼と屋根の上で二三回廻つて見せるのでした……丁度孔雀が得意の羽を擴げて居る場面、或は流行の着物を着たモデルが見物人の前で徐に前や後を向いて見せる時とそっくりな、大そう誇らかなジルでした。ジルは自分でもそれだけ飛べた事に驚嘆したらしいのです。

羽をたゝんだ後もぼんやりして飛び下りる事を思ひ付かない様子でした。子供等が屋根によつてジルを掴へて飛ばしたら、無事に又ベンチの上に着陸しました。

こんな事が二三度續いたので父はもう圍ひから出さないと云ひ始めました。

「閉ぢこめとくのは可哀そうです。」「出せば飛んで行つてしまふ。」「といふのが此頃の父と私との大きなアーギュメントなのです。折角之までに育てあげたジルが、何處かへ飛んで行つて歸つて来なかつたら、と懸念する父の氣持も判りますが……」「前翼を切つて置かないと駄目ですよ。」「と或人は注意してくれませんが、翼を切るなんて思ひもつかないことです。ジルを片輪にしてまで私は家に飼つて置きたいとは思ひません。翼を切る位なら何所かへ飛んで行つてくれる方が餘程ましです。翼は鳥の生命です。飛ぶ羽を持たない鳥なんて思つたばかりでも悲惨です。ジルよ安心しておいで、私達は決してあなたの羽を切り奪らないから。」

一人前になつて山へ歸りたかつたらいつでも歸つていゝと思つて居ます。

腹の語

伊藤 四郎

往昔より日本には精神修練に関する言葉に人の「腹」といふ言葉が随分散見される。私は近頃時々環境のしからしむるのか、腹に関する抽象的名詞や聖賢の遺筆言葉等に就て思ひ出す事がある。文藝の誌上を借りて、思ひ出す片々をとりとめもなく少しばかり書いて見る。

人の呼吸には三つの方式があるといふ事で腹式、胸式、肺尖の三呼吸で、腹式呼吸とは臍と水落ちとの間あたりを動かして細く長く呼吸する事で、是れが生理上自然の呼吸であるとは古今の書に一致する處で、肺尖呼吸とは肩あたりを動かして呼吸する事で、虚弱

性の人殊に婦人に多い。

「真人の息は踵を以つてする」と素門の養生訓に見ゆると、まさか人が踵を以つて息をする筈はないが、完全なる腹式呼吸が長年月行はるゝ時は、そんな氣持がする。健康そのものゝ人にして始めて味はられるのだとは二木博士の語。猷禪和尚が「此の素門の遺訓は頭寒足熱の自然相で、参禪修業もつまり此の自然相を克ち得んとするのに他ならない。見よ、此の山門では嚴冬の候と雖も股引きや足袋は禁じて居る」と私に教へてくれた。雲水が足に凍傷して居るのを和尚に見附けられると、
「此のあたりの寒さで凍傷するのは座禪が足りないからだ。」と叱られるとは雲水連の語。

あの人は腹が小さい、太い、堅い、黒い、柔かい、曲つて居る、眞直い、美しい、穢ない、練れて居る、坐つて

居る、決して居る、うか／＼してゐる、片腹痛い等と数へて来れば限りがない。古人が如何に、精神と腹について考へたかが伺はれる。

臍の下一寸位の處を氣海といひ、一寸五分位の處を丹田といふ。氣海とは讀んで字の如く、丹田とは米の成育する田といふ意、つまり米を食べて生くるもの、即ち米田は精力の源といふ意味だそうなる。

柔道家三船久藏氏に劍禪一致といふ言があるが貴下の御意見はと尋ねた事がある。三船氏は全くそうだと思ふと答へ、言をついで、自分は丹田の中に柔道があるか、柔道の中に丹田があるかと迷ふ時がある。此の迷ひは自分は未だ柔道の極意に達して居ない證しだと思つて居る」と。

明治の晩年より大正の初め頃盛んに傳へられた強健法は氣海丹田の解説と

いつてもよい位だ。併し餘りに岡田式静座法の如く下腹部に力を入れ過ぎた爲り、腹膜炎、腦食血等を起こした人がある。何事も自然に立ち返る事を忘れてはならない。

二本博士が、「中學時代迄は病氣ばかりして居たが、腹式呼吸を以つてめきめき丈夫になり、高等學校時代マラソン競争には榮々と第一着となり、第二着は三十分も遅れて決勝点に這入つた」と、辨々たる腹を出して叩いて見せられた事があつた。

傑僧白隱が遺せる内觀法は唯丹田に軽度の力を抜みず、行住坐臥いつも細長き息をするといふ事である。而して自らの効顯を左の様に書いて居る。

「永年の難病も二三年の中に雲霧の如くに消へ去り、炎暑三伏の候と雖も圍病せず、嚴冬の候と雖も足袋せず火鉢せず、圓顔虎頭に圍繞せられて経綸を

講演し、語録を提唱すること月餘に及ぶと雖も、いさゝかの疲勞なく、今迄解し得ざりし難問題も、氷雪の朝日に向ふが如く解るやうになつた。之は實に内觀法の爲めである。

之も昔の話だが、廣島控訴院判事柳原氏が或日私に「判事なる者は不動心を宿す腹を造らねばならない。自分は判決を定める前に一切の法律を放擲し、還元的妙境に入るべく座禪する。それで時々禪宗の山門に起居する。」と云はれた。

先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふべしとは、聖日蓮の語であるといふが、つまり天地一枚の腹を造らねばならぬといふ意味であると思ふ。擾々忽忽水裏の月のやうな吾人の心構へではどうもならん。

漱石の處へ能く遊びに行く友人に近頃漱石はどんな話をするかと聞いたら

「何だか腹の事ばかり云つて居るよ。」

『現代の文藝人は腹が充分出來て居ない者が多くて困る。何故なれば主義がない、理想がない、どうもびく／＼して書いてゐるやうだ。かう書けば世に迎へられないとか、笑はれるとか思つて書いたやうに見える作品が多く、品位あるものが少ない。文藝は心の歴史で世を導き動かす原動力となるべきもので、萬象の中にある眞、善、壯、美、宏といふ物を作品の中に綜合し閃き出し、還元的妙境に感激するやうになつてこそ、文藝人の精神氣魄は無形にして人心に染み込むのだ。』といふやうな具合でね、座禪の語等もして、『世人よく座禪は自己に親しむ事だといふが、座禪は腹に親しむといつたほうがよい。なんても言つて居たよ。』と答へた。

錦聲流詩吟の創始者遠井女史は「腹と喉と口中と氣分の關係を研究する事

によつてのみ、聲が藝術としての妙境
味を感じざるゝのであると、話された
事があつた。亦謡曲に就いても少年時
代より随分大家の話を聞いたが、その
都度腹と喉と舌の話を聞かされたもの
だった。
(終)

都々逸

谷本晚香

愚痴も言はない清算済み

晝寝しながら待つ平和。

世界戦争は地球の病ひ

時の解決待つばかり。

―館有閑鎖令―

羽を切られて飛べない鳥にや

空の廣さが恨めしい。



眞の味調は
で昭ル

アリゾナ州グレンデール市
昭和醬油醸造會社

SHOWA SHYU BREWING CO.

RT. 2, Box 51, GLENDALE, ARIZ.

凡夫妄語

恒吉盛花

○人生不可解

それ人間の浮生なる相をつら／＼観ずるに、凡そ不思議なるものは、我等人類の一生涯なり。生前を顧れば茫々として知るべからず。死後の事を思ふて見ても、これまた漠々として知り難し。オギヤア、と云ふ呖々の一聲に此の世に生れ来て、五十年か七十年の歲月を、泣いて笑ふて働いて、悲劇や喜劇の幕を開き、死んでしまへば誰も彼も、焼けば灰となり埋むれば土とはなるなり。美人が死んだからとて香水の材料になるでなく、金持が死んだか

らとて金脈になる譯でもなし、儚なきものはまことに人の世の夢幻の如き一生なり。悟るも迷ふも苦と思ふも樂と思ふも、これ皆己が心の持方の如何に過ぎないと思ふ時、此の心こそは實に南無不可思議の奴ではあるわい。あなかしこ。

○無常觀

「智度論」と云ふお経は印度の國の龍樹菩薩が作られたものださうだが、その中に有名な三種の馬の譬へ話がある。第一の馬は騎士が鞭をふり上げると直ぐに駈け出す。第二の馬は鞭で尻をピシリと打たねば駈け出さぬ。第三の馬は鞭で三つや四つ打つても容易に駈け出さぬ駄馬であつた。

これ等の馬と同じ様に人間にも三種の類があるやうに思はれる。即ち釋尊や

基督は一葉落ちて天下の秋を知り、世の変遷を未前に知る叡智と敏感を持つ聖人である。これは鞭を見ただけで駈け出す人間だ。而して斯う云ふ人物は千年に一人か萬年に一人しか出現しない偉人である。第二の人間は可愛い妻子が急死するとか自動車や汽車、飛行機の如き乗物で怪我をするとかつた具合に、直接ピシリと一鞭當てられて、初めて世の無常を知る種類で、これさへもそう澤山あるものではない。第三は親は死ぬ子は死ぬ、家は焼ける病氣はする。それでも世の無常を悟らぬ愚者で、四つや五つ鞭を當て、も牛の角に蚊がとまつた程も感じない代物だ。そしてそれが人間の大部分ではないかと思ふと、神の子だ、佛の子だ、實相だ正覺だとかんで見ても、所詮駄目でが、ス。靈は天を望めども足は地を離

れずだ

だがそれでよいのだ。それで死に損ひもなければ、地獄極樂に行き損ひもなしだ。人間の生涯と云ふものは、悟りもなく迷ひもなく、その身その心其のまゝで、時が来ればコロリ／＼と死んで往くのだ。それでよし／＼。

○戀愛

お経の中にこんな事が書いてある。

一人の旅人が廣い野原を歩いて居ると向ふの方から一匹の虎が出て来た。ヤレ恐しやと後に向くと、後からもまた虎が出て来た。もはや絶体絶命と觀念して側の方を見ると、一本の藤の蔓が下つて居るので、それにぶらさがつて下の方へ降りて行つて見ると、底には大蛇が眞赤な舌を出して、降りたら各んでやううと、待ち構へて居る。井戸の中間で進退極まつて居る處に、白

黒二匹の鼠が出て来て藤の蔓をかりがりと齧り初めた。大變とはこの事だ。

上には虎、下にも大蛇、頼みの藤蔓は鼠が齧る。萬事休すと觀念して大空を見上げた時、一雫の蜂蜜が口の中へポタリと落ちて来た。すると虎も大蛇も鼠も皆忘れてしまつて、たつた一雫の蜂蜜に心を奪はれて我が身の危険を忘れてしまつたと云ふ。

以上は我等凡夫の生涯を譬へた話である。地水火風の虎に圍まれて、古井戸のやうな一軒家の中に住み、出る息入る息が唯一の頼りで、藤蔓を齧る白黒の鼠は晝夜であり、井戸の底の大蛇は地獄の猛火である。日々送る命数が分り切つて居りながら、上から落ちる僅かばかりの蜂蜜に身も心も奪はれて、愛慾や色香に迷ひ、世間の名利に目くらみ、遂に醉生夢死の生涯を送り、

死んで地獄に行くのが凡夫の常であり、これが無信仰者の人生行路だと、先覺者は教へてくれますが、御同行者達如何なものでございませうか？

○生死を越えて

誰かの歌に「生くるとも死すとも可なり我はただ春の光に流れてぞ行く」と云ふのがあつた。まことに悟道徹底したよい歌だと私は思ふて居る。多分此の人は病床に在つて明日の日も知れぬと云ふ身であつたらう。お浄土には佛様が待つて居て下さる。此の世もさまで住み難い所ではない。お浄土に参つてもよいし、此の世に生きながらへてもよい。いづれにしても悟つた身にはかわりは無いのだ。此の世に生れて来たからには一度は死を越えてお浄土へ行かねばならん。只その間の人生三十年なり五十年なりの喜怒哀樂が長い

か短いだけの違ひなのだ。

ほんとに「生くるも死すも可なり、我はたゞ春の光に流れてぞゆく」で誠に平和と安心と微笑に満された心境と云ふ可きではあるまいか。

○感謝胸に満つる時

私の意氣が挫けて希望を失ひ、生活に倦怠を感じる時、家庭の和合に調子の悪い時、私は何時も、噫々また神の御心に添はない生活をして居るのだと氣がつくのです。その時は私の魂の進むべき方向を誤つた時です。

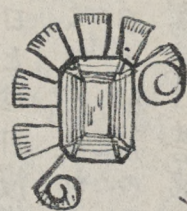
恩寵胸に満つる日は言葉に角がなく、自然に笑顔になれます。恩寵胸に満つる日とは自慢傲慢の無き日、同情心の湧く日、親切を盡した日は、噫々今日の日も神様の御蔭で、幾らかでも人様の爲めに善事をなしたと、自らを省みて神に感謝する日であります。

然し恩寵に満ちたその日が、一年の間にそも幾日ある事でせう。思へば浅ましい心であります。その浅ましい心と氣づかして戴いた時が、私の魂の方向轉換となるのです。

○意氣

「千金結び難し、一時の歡、一飯遂に終身の感を致す」と云ふ語があるが、人間は利慾にばかりに集るか云ふと、強ちさうばかりでもありません。ヤクザの博奕打でも一宿一飯の恩の爲めには一命を投げ出して惜しまない程の義理を知つて居る。恩に着せられて貰つた千金よりは、眞心から與へられた一杯の飯に感を深くするのが人情である。そこに人心の美しさがあるのだ。

「人生意氣に感ず、功名誰かまた論せんや」とはこの感を序したものであるまいか。(終)



寶石の話 (五)

新関惣太郎

夜光石カーバンクル

昔、近東からヨーロッパにかりて、此カーバンクルと云ふ赤い石が夜になると恰も松明クイマツの如くに光を放つて、讀書でも出来ると云ふ傳説が續つて居つた。そして聖書にある「ノアの洪水」の時に用ゐた方舟ハツブネの中にも其カーバンクルを燈火の代りに使用したと眞面目に信じられて居つたのであります。乍然、カーバンクルは愚かダイヤモンドでさへ、如何に高價でも全然光線のない暗夜には光を放つものではありません。けれども此カーバンクル即ち今日のガーネットは、良く注意して見ますと、其中に恰も火の燃えるが様な閃きを見る事が出来るので、古の人々は彼等の理想として暗夜に光を求むる心持を此寶石の中に探し、遂にガーネットを土臺として「夜光石」の傳説を作り上げたものと思はれます。傳説の中に一人の情深い寡婦が居りまして、或時一羽の足を痛めた雛鷓を見付け、ものであるから、自分の家に持ち歸つて大切に看護をいたしました。聽て此鷓は一年後に足も治り一人前となつたので、遂に空高く舞上り一二度中空に輪を描いたと思ふと何處

ともなく飛去りました。寡婦は非常に淋しく感じましたものゝそれから又幾ヶ年もすると、今度は先の鶴が一つの赤い石を啣えて来て、此寡婦の坐つて居る膝の上に置いて行きました。處が其赤い寶石は夜になると、實に美しい光を放つて近所近邊の四方を照したのであります。之が即ちカーバンクルと云ふ寶石であります。

又十二世紀の頃、アビシニヤの皇帝プレスター・ジョンを訪問したと云ふ、バイザンティン皇帝の手紙の中に「プレスター・ジョンの宮殿は、凡て水晶を以て窓を作り、純金の机に紫水晶の板を張り、室内はカーバンクルを以て照して居る。」と書いてありますが、勿論之は傳説に現はれた想像のものであります。

東印度

に於きましても、此赤い寶石は夜光の作用を爲すものとして、宗教上の器具に使用されて居りました。然し大抵の場合、昔魔法使や占者が良くやつたトリツクのやうに、裏の方から見られないやうに光線を導き入れるか、又は「燐光石」を寶石の裏に張りがしてあつたので、カーバンクル其物が光つたのではないのであります。

隕石

之は直接、聖書の中に出て来ませんが、創世記廿一章の「ハガルの話」と、もう一つは私共現に往んで居るアリゾナ州とも大なる關係がありますので少しばかり書いて見ませう。マホメット教は世にも熱心なる信者を有する珍しい宗教であります。現在世界に三億萬人の信徒を持ち、而も彼

等は日に五度一齊に聖地メツカに向つて世界の隅々から祈禱を捧げるのであります。同時に彼等の希望は一生に一度此聖地に巡禮をしたいと云ふ念願の下に生きて居ると云ふ事であります。

そうして此巡禮者はメツカに行つて何をするのかと申しますと、彼地にある本山即ち聖堂の隅の親石に「唵^{おん}」して歸つて来る方でありましたが、其隅の親石こそは、實に此隕石であると申されて居ります。何故此隕石が左様に尊いかと申しますと、彼等の云ふ「ブラツクストン」即ち隕石は昔殷祖マホメツトの在世中、一夜天の使の長がブリエルが頭はれて、此の地上に建てる「アラ」の神の聖所の隅の親石とせよとて、天より降し給ふたものであると云ひ傳へられて居る故であります。

又當アリゾナ州は世界第一の隕石の落ちた跡が、丁度噴火口のやうにウインスローの南、沙漠の中にあります。當ポストン附近にも時々發見され、又キヤニオンデアブロは有名な産地となつて居ります。

隕石を寶石の中に入れる事は如何と思ひますが、夫でも指環の玉やペンダント又は時計のラケット、本立て等を利用して面白く珍しい物であります。東京九段の遊就館や上野の博物館等にも澤山陳列してありますが、勝海舟や榎本武揚氏等が之を双劍に鍛へて、皇室に献納した話は餘りに多くあります。昨年ユタのトツパースに於て、二人の日本人が珍しい大きな隕石を發見した事が新聞や雜誌に出て居りました。次に出て来る寶石の數々は、

祭司長の胸當

でありますが、之は前にも申上げました通り、エズラエル十二の支派に模型りました十二種の寶石を用ゐて作つた誠に美しい物であります。

初めモーゼはエズラエル民族をエジプトの國から導き出して、シナイの荒野に差し込み、りまして間もなく、茲に新しい組織を以て、新しい宗教を作りました。

乍然其宗教は今迄長く住んで居つたエジプトの宗教の羈絆を脱する事は六ヶ敷いと見えて、此祭司の長の胸當も彼地の祭司の用ひたものに模倣して作つたものでありました。此ペクトリアルに即ち胸當は中央に聖甲虫を置き、其周圍にエメラルド、ヂャスパ―及びラピス・ラズーレの三寶石を何れも金の槽に入れ、て配合したものでありました。エズラエルの方は聖甲虫に代るべき神は「靈」の神でありました處から、只十二の支派の代表的寶石を横に三個、縦に四個、都合十二種類を配列して祭司の首から前に鎖を以て下げたのであります。

斯様に美事な祭司の長の胸當も年月の経るに従つて、だん／＼曇を生じて参りました。即ち權威を失ふて参りました。第一世紀の有名なユダヤの歴史家、ジヨセフアスは「神の前に彼等は罪を犯し神に遠ざかつた爲め」だと喝破して居ります。

紀元七十年

エルサレムの陥落と共に神殿にありつた幾多の寶物は悉くローマの軍勢に分捕られて、彼地に運び去られて終ひました。其

時此由緒ある祭司の長の胸當も、ローマにあるコンコードの宮殿に移されて終ひました。其後、バンダール人がローマを略奪した時に、ヴィゼゴースの王アラリツクが持ち去つて終つたと云ふ事であります。又一説にはペルシヤの王チヨスロスが自國に持ち行き、彼地にある王の寶物藏に入れてあつたものを、何時の間にかアラビヤ人の隊商の手に渡り、今日のユダヤ人の如く世界中に散り分れ、其行方が不明になつたと申して居ります。何れにせよ此歴史的世界の寶物は、今から約千五百年以前に見えなくなつた事は事實であります。實に惜しい事であります。

此外、モーゼの命じた「聖香物」の中の一つ「ナフタ」は今日の琥珀であると解されて居ります。琥珀は寶石と申しましても、植物性の樹脂の化石から成つて居る事は御兼知の事と存じます。古代エジプトの宗教は之を香として燻べた事は歴史に明かであります。又申命記八章を見ますと、

堅き磐石

の中より水を出し云々と書いてありますが、之は民数記廿八章の記事を反覆して居るのであります。兎に角此の堅き磐と云ふ言葉は、英語のフリントでありまして、日本の「火打石」に當るのであります。此石は人類の原始時代に於て最も肝要なる役割を爲した石であります。人類歴史の上から申せば、金屬の發明は極めて新しい出来事であり、太古に於ける原始人は何れも此フリントを以て一切の器具から武器造も作り、只にモーゼの如く水のみにあらずして、之より食物をも衣服をも出して居つたのであります。

僕の雜記帳

(3)

松原信雄

「子供の教育のために……我子は無教育のまゝ、轉住所内で放縱な生活をさせたくない。」さう云つて昨日一人の友は出て行つた。

今日も他の友は、「行つて見た處、聞いたり思つたりしてゐたのとは外部の事情はまるで違つてゐる。舊友達は皆歡迎してくれた。危険な事はない。就職の機會が多い今出来るだけ儲けておいて、戦後の不景氣に備へておかなければ……」と希望を抱いて加州へ歸還した。

そして明日も明後日も、友は、同胞は轉住所を後にして東に或は南へ北へと四散して再び會ふやうな事はないだらう。

「米國に永住の決心をして、子達を米國市民として育て上げ、自らも『忠誠』を誓つて、インターメント・キャンプや隔離キャンプには行かず、轉住所に留まつた日系人だ。その國籍の有無を問はず、無意識的に米化してゐるのが轉住所民の大部分ぢやないか。WRAの命令に服して、戦時景氣が招く外部へと急ぐのは當然だ。」別の友はさう解剖した。

出所する、しないを論議する時代は既に過去となり、老齡・病弱又は家庭の

事情などで出所できない人々を除いて、多数者はそれ／＼自活の道を求め、自己發展を目指して再生の新天地を模索してゐるのが現状である。

此の際私が同胞諸氏に訴へ注意を喚起したい事は、前辨でも一寸觸れて置いたが、数は力であるといふ物理上の原則に就てである。五人で一莢加の未開地を開拓するに二日を要すると假定して、それを一人でやる場合十日の日数があれば出来るだらう。だが、一人では百貫の鉄棒一本をそのまゝでは絶対擔ぐ事はできないが、十人かゝれば、易々と擔ぎ上げる事ができる。茲に多数協力の偉大さがある。

我々日系人は所謂少数民族であるから、白人社會には見出しえないやうな優れた才能と特殊な技術や手腕を持つた天才を除いて、各個人としては白人とは絶対に経済的また社會的平等地位に立つことはできない。秀でた才能と相當な手腕を持ち乍ら日系人なるが故に才能手腕共に劣つた白人の下位に立つ悲哀をなめなければならぬことは既に同胞諸氏が經驗されてゐる處である。

各個人としては才能手腕の有無に関らず、白人に比較して非常に不利な立場におかれてゐる我々も、力を協せたならば、必ず各自の特性を有効に發揮する事ができて大事を成就し、同胞全體を裨益する事は論をまたない處である。所謂「國」を持たないユダヤ人が、今日歐米諸國の上層部に臨してゐる事實は、彼等民族の協力團結の賜物に外ならないのであつて、我々にとつて大きな教訓ではなからうか。

我々日系人が協同組合、銀行、保險會社、協同生産、販賣網等を組織して共存共榮に努めたならば、假令少數民族といふハンディキャツプがあらう共、それを突破して必ずや經濟的社會的に大きな發展と飛躍を成し遂げる事ができるであらう。私は共同組合の組織者、指導者の出現を翹望して止まない。その際同胞各自に要求さるゝことは、指導者に對する信頼と尊敬とそして絶對的協力である。

自ら選出した代表者乃至指導者、又は社會公益のために軼身的に働いてくれる人々に協力しないのみか、彼を叩き落さうとして、徒らに非難攻撃して、折角の事業を不成功に終らしめ、結局自らの損失を招くやうな「惡癖」を過去、の古着と共に脱ぎすてたいものである。

Compliments

OF

NATIONAL GROCERY CO
MESA, ARIZ.

Wholesalers - Quality Grocers

SEARS

Assure You Satisfaction

ロサンゼルス市
シーヤスロバック商會

御注文は
シーヤスで

SEARS ROEBUCK and CO.
LOS ANGELES, CAL.



詩人白
外川明
經年
永瀬旁
川柳
島原湖風



新生

牧さゆり

七月になれば

空も山も黒いブラックも土も

皆夏の化粧をして来る

暗い私の部屋も明け放たなければなるまい。

清々しい夏の香に

心の窓もあけ切つて

夏の息吹きを吸はなければならぬ。

ニブ^ツブラック次の廣場と廣場の間がドイツ子になつてゐた。

同じブラック内のMさんHさんの家には赤ちゃんが生れたとか。

黙然として何も知らない間に――――

黙々として思索のかれてしまつてゐる間に――

x x

x x

愕然として

忘れぬた空を見た

山を見た

土を見た

砂原にもものびつ丈のびてゐる草の青みを見た。

x x

x x

自然の恵みの大いさー。

x x

x x

ドイツの小高い土手に佇つて

深々と夏の香を吸つた。

偉大なる者になり物つて

吸ひ込んだ夏の薫の幸福を味はひつゝ

一息に土手をかけ下りた。

x x

x x

私はまだ／＼強くならなければならぬ。

x x

x x

MさんHさんの赤ちやん達もすく／＼と育たなければならぬ。

(七月初日)

生 活 断 章

のびたひげそる、
かがみいつぱいの
わかば、あはば。

×
スラツクも派手なる、
をんな煙草の火をかりる。

×
さみだるる、牛追ふ聲の
牛は牛と吠ゆる。

×
ふるとはるるとくもる、
ひなげしいろこく

ひなびたるでんゑんに。
整然たる日本人の作物と、

低いろしろ姿のわけなく
うれしい超非常時。

町の灯は葉がくれに、
どのバスもまんゑん。

×
ぬるいお風呂にひとり
とほくちかくの蛙の唄を
ききほれてゐるじぶん。

×
はなれてすめば
卯の花 楓の花 桐の花と
若葉にうもるるオクデン。

×
拓らける運命を、
いつも窮屈にする、癖。

×
文月、一五、

バラも芍薬も花さかり。

子 巖 溪 井 片

盲聾者

マツイ・シユウスイ

時は変り 人位も変る

見えるもの 聞えるもの

窮りつばい 戦時の痛みだ。

忍耐、傍観――

どれまでの解釋だらう

若しこの度量が無限であれば

三十年の學びを 學び直したい。

俺は學びに又仕事場にて

常に盲聾の態度をとつた

汝ら優越感の達人達よ

俺の盲聾の業は

新しい盲聾の途を發見したのだ。

平和とか博愛とか平等とかいふ

魔酔語が到る處に満ちてゐる

あゝ 如何にも愚かなるを

神の教訓を背く人間社會ではないか。

俺は盲聾者！

あゝ美しき今日の主義―主義の説

この地球星が燃えて行く時

キリストの再臨の時

汝等の正體は酷く審判を受けろのだ。

金言も多い

策言も多い

まるで青葉を落すやうな世だ

妻は

無口な俺にペンを持たせてくれる。

地上の天國

土屋天眠

(6)

妖雲空に叢りて

天日爲に晝暗く

道義地上に影を絶ち

人は路頭に迷ふらん。

世は溷濁の淵に墮ち

正邪曲直差別なく

暴力頻りに蔓りて

荒み行く世ぞ惨^{ミジメ}なる。

邪道天下に荒れ狂ひ

宗教爲に權威なく

人道滅びて光なき

末世の姿君視ず哉。

誰か世紀の神となり

人類二十三億の

霊と肉とを救ふべく

天^チ父のみ聲を傳へざる。

天の指命を身に負ひ

雄々しく起つて獅子吼る

二十世紀のボーロは

遂に出ずに仕舞のか。

救の道に奮ひ起つ

正義に燃ゆる神の子よ

清く尊く世に生きて

地上の天國建てよかし。

句俳律由自

夏 夜

ことしの桃のかほりは夏夜の妻と娘と

柿若葉青い雨して地の雀

夜蟬なく更けて夏夜の砂利道

壁に三とせのしみがありカナ咲きつゞけ

降る雨の霽れて熟れたる麦の明るさ

長き日の昏れて榆若葉茂りくる中

今日もことなく過し煙草の花の中れてゐる

日本空爆の短波とて我うに伸びくる夏草

露草の道は一筋草深きおくつき

子 芥 田 永 徳

句俳律由自

木 蔭

木蔭うつむいて編棒うごかしてる白い手

小さな着物干して若妻であり母であり

山を夕日にして峯の雪巖はそそりたつ

屋根の上に月がある娘下駄はいて来た

すずめと私と柵のとまりで木の蔭

ともかくもこの夏もすごせさうな柵中

バツタが飛んだ庭石焼けてゐる

犬は池の水飲んでる日傘で鯉をみてゐる

星が尾を引けば肌寒い野外映画

星 知 藤 佐

句俳律由自

れこれあ住轉

宣傳ビラ堆たかくつみ白人愛想よく話さる

WRAの六分と我等の氣は^持いつもチグハグで雑草に穂

日英兩語のビラ日本文だけ見て朝の仕事にゆく

隣りは朝からハマーの音出所の荷の大きい小さいの

加州の土になると六ふてクレイツ造つてゐるのが日向

記念の硯石が重たい箱作りの手傳に汗ばむ

何事も覺悟の前ですと別れる人の姿、初夏

出所のバスがたつてしまふと群集の中のひとりがわたし

沙漠にポイと置いたやうな生活^{くらし}にポイが芽を出した

逸 幹 口 河

ポピイの會

(六月句抄)

○

雨の雫の林檎は青い實となり。

卯の花咲きひろがり開したる教會の扉。

○

雑木透し来る春陽の馬小屋から馬の顔。

鋤けば鋤く所に來てカモメ土に憩う。

○

休暇に歸りオバーシーと云ふ若者の面色。

チラリホラりと日傘が山にはまだ雪がある。

○

囀あちこち一羽はバーグワイヤーに來て。

かうして私の生活も晩年に入るか。

○

葱の青さ扉にくばつて來た時報です。

夕月、ふつととんだ球の方へ飛んでゆく鳥。

○

雉子鳴いた跡はツラクタの音ばかり。

雀囀つてゐる暖かい窓越しの青葉。

片井溪巖子

萩尾茅作

松野南龍

古屋翠溪

米倉久枝

米倉林泉

○ 陽の入る黒い山うのふるさと。
丘の曲線落葉にもえてゐる。

塩澤徹四郎

○ 今月から月給がつく。ポプラの芽ぐん／＼太る。
遠山の雪白く今日歸還する人多し。

廣瀬米草

○ 此處に來て日本風呂に聞く蛙。
汽車に乗り合うて兵士等の規律を見た。

森本彌山

○ 轉住勧誘のパンフレットつぎつぎと來て今日も浮く夏雲。
日毎寂れゆくこゝにも執着のありピーの種まく。

河口幹逸

○ 故國に加はる重壓の夜の蜘蛛壁這うてゐる。
雀汚れた胸の屋根の下とほる。

中村夕佳里

○ 皿に海苔まきを親と子と話がつきない。
征く子を見送り黙然と疲れてゐる母。

高木好文

○ 柳芽をたて日溜の手枕。
裸に雀の糞も涼しく夏休となる。

府川真砂夫

○

どこに行くあてもない葦草根分してゐる。

寫眞に香捧げ涙落すまいとする。

○

訪舊知

茂りゆさ／＼窓に觸る夕べの戸を叩たき。

やがて逐はるゝ家居なる夏草の茂りを切る。

○

獨身者指先に石齡の匂が残りダハム捲く指先。

鯉鱗が竿ばかりとなり夏雲かかり。

○

うす濁りて夏朝の豆腐しづめたる水。

ねぎの花となり君イタリヤより凱旋す。

○

セーヂの野風落ちし夕月が影する。

道で別れて夏となるため葉のいろ。

○

畑にこやし撒く馬に仔馬ついて歩るく終日。

フラットタイヤはめかえてゐる此處から廣い青麥。

○

果しない戦争で果てしない沙漠の線陽炎。

みづすましみてゐたりしがこどもいしなげぬ。

林 百尺樹

津 村 木 洋

松 野 寶 樹

大 月 喜 三 郎

田 原 紅 人

武 井 古 流 星

森 田 よ し 丈

水無月歌會詠草集

(順序不同)

児王なを

澄みとほり河鹿のこゑのひびくなり昏る堤をたもとほりつつ。

遂にわが乳房の一つは挟らむとし瘰癧なりしかとまたも疑ふ。(乳瘰と診斷され)

健かになりしと思ふも暫時にていつしか吾れは瘰癧病みぬたり。

輕からぬ手術といまは知りにけり心そなへて時日待つ吾れは。

デンバー 安井 静女

子の試験首尾のよかれと親吾れは爲すにすべなく只祈りをり。

歸り來なばかもかもせむと兵の子を待ちつつ吾れのこの頃たのし。

夕立の雨に埃の洗はれて庭樹の若葉すがすがしけれ。

鈴木 縁松

夏の夜の更けゆく空にかまびすし群れ渡りゆく澤雁のこゑ。

小夜更けて静まる庭の瓜畑に牛か群らがる鈴の音きこゆ。

大いなるコロラド河の水堰きて流れ調ふ人間の力よ。

堰かれては流れもあへずコロラドの水は溢れて谷間浸せり。

永瀬正臣

因はれの庭にめでにし葵花こゝにも数多いまさかりなり。
朝日光照り添ふにはの綿の樹の青葉動かしそよ風わたる。
跳板や高く飛びしが水玉あげ水泡うかせて童潜れり。
めざめをば待ちあぐみをるにみどり児はやゝ動きしがまた寝入るうし。

リバサイド 廣石 静香

温室に餌あさる雛を愛でにつつ時たつ事も吾が忘れるき。
指折りて生活の代となる雛を吾が数へつゝいたく愛しき。
初なりの瓜きざみつゝ静かなる夕べの厨は心樂しも。
つゝましくあらなと念へなほし吾が心みだるゝは世にかかづらふ。

大園 晴子

嫁

舅姑をやりこめたりとほこりかに語る二世の若き嫁はや。
憂き事も嫁なればこそ忍びゆく大和をみなを愛でなむ吾れは。
離れ住まふ姑にほめられてあるはしらず愚痴言ふ吾れは友に叱うる。
つつしみて營むものの勝利をば吾が行く手にも期して生きまむ。

赤松傳代

三年前の沙漠のおもかげ今はなし花と青葉の庭に向ひつつ。
日盛りの道に吹く風いや暑くさながら火事場を通る心地す。
クーラーの涼しき風に吹かれつつドレス縫ふ間の心安けさ。

木下落葉

街燈に石投げ遊ぶ他人の子を見つつ淋しも子の父我れは。

街燈に石投げてゐし悪童をきつく叱りて我れと淋しむ。

離婚の流行る現代にして吾娘汝は日本人に嫁げるぞ良き。(最近結婚せる娘)
大いなる年俸に心うち揺らぎ日語教師となるを怖るも。(或る友の手紙に答へて)

北林静江

前線の子に送むと吾が焼きし煎餅は今宵小包としぬ。

男の子等にまじりて我れも聞かむとす祖國おやぐによりのニュース如何にと。

児玉氏乳癌とならう。

何となく癌でないやうな氣がするとのらして君は笑み給ひしが。

手術受けにフィニクスさしてゆかれしかひたに祈らむ君の平癒を。

川口静洋

朝毎に池の水の面に咲く睡蓮はすはこの頃吾れを疾く起すなり。

雑草あらくさの中にこぼれて咲くケシの咲ゆれど寂し赤き一輪。

邪^{よこしま}の道は滅びに入るものをなど醒めざらむあはれ吾が友。
由々しかる時とし思へばどこまでも吾れ生き抜かむ使^こ命終るまで。

クリスタル市 川 原 八 重

停電の夜をなすなくて歌思へば夫も黙して外など見をり。

窓の外に俄か嵐は烈しけれ歌思ふ吾れは心静けし。

うばたまの暗をつんざく雷鳴に思ひは及ぶ琉球の上に。

柴 田 よ し

再住の荷箱を造る鋸の音朝はやくより窓ちかくきこゆ。

夜もすがら啼き明しけむ蛙子の轢きつぶされて今朝の道の上に。

四拍子の音楽の音としもきこゆなり夜を交々と蛙啼くこゑ。

永 瀬 勇

部落生活 (一婦人の内省を促す)

協調に欠^かくる一人がここにありて部落^{むら}の政治^{まつりごと}乱れなむとす。

神の名に言^{こと}寄せ言ひて人皆の爲^なす事を汝^なはせじと頑張るか。

自尊心持てるはよけれ時にして過ぐればつひに鼻もちならず。

す 感

かたよらず在^あらむとすれば悪しざまに吾れを言ひ觸らす陰口もあり。

後記

豫期してゐた様に愈々ポストンにも酷熱の夏がやつて来た。今日は今までにない一番暑い日だつたと思ふ。戸外は確かに百十五度以上も昇つてゐたうかこの暑さでは今日の歌會は出席者が少いのではなからうかと内心危んでゐたのであるが、熱心な歌友達は暑さ位には敗れず、十名以上の集りを見た事は誠に強い次第であつた。既に諸君も御兼知の通り今回は兎王夫人御病氣のため面倒な歌會の世話を貴家夫人に無理からお願ひしてやつて頂いた事は此處に特記して感謝せねばならぬと思ふ。其れから永瀬正臣君が自分の事務所を歌會の爲めに開放して呉れた事も感謝せねばならぬ。お陰でクーラーの涼しい風に吹かれながら歌會の持てたのは何よりも幸ひだつた。又柴田夫人の膽煎りでアイス水や菓子御馳走にあづかつた事も忘れてはならぬ事である。

前述の如く兎王夫人は乳癌と云ふ由々しい病ひの爲めワイニクス病院に入院され、去る廿二日に豫想以上の大手術を受けられたのである。其の後兎王夫人の短信によると手術後の結果は誠に良好との事であるから先づ御安心申上げてよいかと思ふ。此の上はゆつくりと充分に御保養あつて一日も早く御快癒の日の來らむ事を祈る者である。そして又其のあかつきは再び吾々歌會の爲めに御盡力下さらむ事を今から御期待申上げてゐる次第である。ポストンも七、八月が一番暑い時であるから、歌友諸君にはその健康の上に充分注意あつて、そして益々斯道に精進あらむ事を念じつゝこの後記のペンを擱く。四五・七・一 記ス

佐佐木信綱の歌 数首

隨感隨想 (二十一首中より)

つゝましく我を守りてありふれば時にさびしき思ひぞわがする。
争ひて我をみにくくせじと思^もへど下^{しも}の心はいきどほりもつ。

心やゝなごみもて來ぬ我しらず面わけはしくなりてありつらむ。

むれをはなれ一人秋風の中に立つ心さびしく嬉しくありけり。

雨の音しづかに胸に響くなり思ひのどめていねむ此夜を。

わが姿ならじかと心をのきぬ塵にまみれたる街路樹見つゝ。

いたむ肩いたむかひなもわがなればわれをいたはりさするなりけり。

朝の胸の清くすがしくまむかひに大天地をむかひてありけり。

去るに臨みて

歌友の皆様 遂に皆様方とお別れせねばならぬ時がやつて参りました。斯う申上げると皆様方の中には本當に 突然だ とお驚きになられる方もあるかと思ひますが 愚生としましては日本歸國を断念して以來 既に二年近くもこの轉出の事に就いては悩み續けて来たものであり やつと最近其の去就が決まつた譯です。やゝおそ播きの感がせぬでもありませんが 兎に角出る事にしました。七月號ポ文誌上に矢形溪山氏並びに石川凡才氏の執筆に成つて居られる如く このポストーンに文藝協會が創立されて既にこゝに三年 私も其の最初からの一員であり 其の長い間を歌友の皆様は よく とるにも足らぬ愚生の爲めに熱心なる御援助と御指導とを給はり 今日までこの歌會を在らしめて下さいました事は全く何んと言つて御禮申上げてよいものやら其の言葉に窮する者であり只々厚く厚く感謝申上げる次第であります 幸ひにポストーン歌會にはま

た 児玉夫人、柳本夫人、永瀬正臣君、木下落葉氏等と云ふ 十年二十年の作歌経験を持つて居られる方々がありますので 小生去つた後も益益盛んに歌會は繼續されて行く事と確く信じます。又ポストン文藝のある限りは其うあつて欲しいと望む者であります。

さあ 去る と云ふ事になり斯うしてお別れの拙文を認めてをると次から次と歌友の皆様の面影が眼前に浮んで来 なかなか去りがてにする思ひであります。何卒皆様酷暑の折柄ですから充分に健康に御注意あり度く 其して斯道にひたぶる御精進を續けられむ事を祈念します。斯道にたづさはつて居れば又何時か御眼にかゝれる機會もあるかと存じます。 いち／＼お訪ねしてお別れ申上げるが至當とは存じますが 今はそのれもならず 甚だ失禮とは知りつゝ、この誌上を借りて 一言去るに臨み皆様にお別れの言葉を申述べさせて頂いた次第であります。

再び重ねて皆様方の御健康と御自愛を祈りつゝ、尚ほ愚生に與へられましたる多大の御友情に感謝しつゝ、このペンを擱くものであります。

さようなら (勇男)

去るに臨みて

永瀬勇

ふた年をなやみつゞけし吾が去就今日定まりてうらはれられし。

亞米利加に骨を埋めむ心成り吾れは出でゆく今日こゝを後に。

亞米利加にかたき礎^{いすえ}残すこそ今の我等の責務^{つとめ}ならずや。

この三歳^{とせ}吾れを在らしめし。ポストンぞ心なかなかに去りがてにすも。

子等の邊に飯食む事も暫くの別れと思へばこゝろ弱るも。

何ひとつ盡すなくしてをめをめといかで戦後をかへらるべしや。

家を焼かれ子を犠牲^{にえ}とせし祖國^{くに}人に何の面^{おもて}さげてま見得べけんや。

夏 雜 詠

梅雨晴の山なごみ水豊か。

ハトマウンテン 藤岡 細江

牛樂し梅雨晴の芽も紙めもして。

ビクホーンの嶮に夏川奔流す。

トンネルに山容変り笑ひけり。

暮れなづむみどりの原の水溜り。

金星や我が夏旅を守るかに。

月星を映し夏曉の沼静か。

コロラドの縁千里に水清し。

地につきし柳絮また舞ふ行衛かな。

流域の新樹に山丘赤茶色。

ハトマウンテン 藤岡 無 隠

面影は今我が胸に招魂祭。

戦没の子の二十歳誕生日

世に在らば^{ハダチ}二十の祝梅雨の天。

羅 府 始 良 春 海

二三本夕顔咲いた小庭かな。

釣人にカメラに向けたる堤かな。

五 人 集

月は西セイヂが原の日の出かな。

百合の花匂ふや風の来し窓に。

時々は生國^ニをなつかしむのりの鯨。

直水に沿ふて夕日の赤蜻蛉。

ト　パ　ス　島　本　巽　村

青芝や露燦々として日の出。

かりそめに向日葵町と名づけ住む。

こほろぎや床の下なる冷蔵庫。

埒もなきデマな飛ばしそ夕涼み。

黄塵や夕立前の一と驪。

ト　パズ嶺に置く灼雲や夕立来。

ポ　ス　ト　ン　吉　里　竜　耳

日の丸の舟に追わるゝ池目高。

詩集らし握りたるまゝ晝寝人。

句を添へて日誌とづるや灯取虫。

河端に釣竿切るや夏の露。

中州のむコロラド河の雪解水。

鵜悠々人無き岸にたわむれる。

マザナ吟社例會句抄

本伏せて蠅叩手にしげしかな。

短夜や娘の初便り讀み返し。

早發ちの轉住人や明易き。

撒く吾れに水しぶき来て風過ぎぬ。

葉柳の垂れし窓よりセラの嶺。

兵の子と別れ惜しむや明易き。

精彩のケーキに一つ蠅の来し。

短夜やつれし子ねむる野外劇。

打水に興ずる子等の一とたむろ。

葉柳や故國の音信絶えしまゝ。

邪見なる眼が水打ちの子を追ひぬ。

風鈴草の花はぶらりと水を打つ。

小坂静子

木村白嶺

山田天民

上村若舟

土屋天眠

永井翠敏

ポストン刈柳

初添削講座 島原潮風

題「勝ち」 △原句 ○添削句

堀田瓢池

△土俵ぎは反りで小男敵斃し。

反りで小男敵斃しと説明過ぎるから

○小男に扇が上る土俵ぎわ。

△背水の陣で一億大勝利。

未だ判らないのだから、

○背水の陣で一億勝つときめ。

△大賭博最後の五分で勝を占め。

勝やうどうやら判らないから、

○大賭博最後の五分で勝つ積り。

勝つと云ふ題だから勝つたと詠ん

でもよい様だが、川柳は實際を詠む様心掛くべし。

谷本晚香

△一丸になり、戦勝へ誓揃ひ。

添削不要（然し報告）

△必勝は最後に軍知ある自信。

此の句でも宜敷いが左の句と對照すべし。

○必勝は軍智最後にある自信。

△勝関の来る日を待たう忍従し。

此の句では座五と中七とがしつくり来ないから、之を續ける様に詠むと、

○勝関の日を樂みに忍従し。

之でどうやら川柳になった。

安井静女

△かんばんと全く違ふ勝つたは。

此の句は（看板と全く違ふ勝つた

汗」と讀むのではないかと思ふ。

(次辨迄に考へて置く。)

□以下の如き題で以前添削が来てゐたが頁の都合で載せられず。依つて今回少し記載します。

添削 課題「緩む」

井上二葉

△空高く緩かに舞ふとんび二羽。

○餌をあさる鳶緩か空に舞ひ。

△流線車赤い旗見て足緩む。

○赤い旗速力緩める流線車。

同 課題「運」

同

△運なりと思へど愚痴も出る不運。

○不運だと愚痴も混つて柵の内。

△詫住居運の神様恨めしい。

幽霊でも出さうですな！(恨めしいと！)

○神様を恨む不運の詫住居。

△おみくじの大告引いてカづく。

○大吉を引いて一層カづく。

同 課題「涙」

同

△叱られた膝に落すや露一つ。

此句では膝か叱られたやうだから、

○叱られた膝に落した一雫。

△ひるがえる日の丸見れば眼に涙。

○翻へる日章旗見て嬉し泣き。

とでも詠んで嬉しさに涙が出るとする。

△顔見れば先だつものは涙なり。

○顔見れば嬉し涙が先に立ち。

同 課題「力」

鈴木縁松

△總力を上げて難関切り抜く。

○總力を上げて難関切り開き。

△一億の力を頼み柵に生き。

○一億の力頼みに柵に老。

▲第六十六面川柳句會

課題「信仰」

峯土香

上野鉦実選

神佛を信じ安住の明日を待ち。沖本かもめ

信仰に活きて三年柵に耐へ。同

信仰の力館府も丸く住み。星野光葉

信仰は曲げぬ男の皮膚の色。同

信仰へ理屈が何時も邪魔になり。稲垣秋月

念佛に明け暮れてゐる母の日々。山内狂月

子に征かれた朝夕を神佛。同

信仰のない病人の沈み勝ち。早川美貴子

獨り子を捧げて強く神に生き。北村子守

信仰を説く身が知らぬ君の恩。同

信仰の力楽しく生活す日々。津村汀村

合掌の前に戦地の息子の姿。鈴木胡仙

浮き沈み神の御旨と氣も軽く。関 五松

子は親を真似て佛へ掌を合せ。吉里竜耳

信仰の話となると夜を徹し。島原浪音

五 客

信仰の心動せぬ時局談。

星野光葉

信仰を看板にして處生通。

鈴木胡仙

未来には佛となれる珠数を繰り。早川美貴子

信仰の徳は貪しき忘れさせ。島原浪音

一億の信仰日本は神の國。同

人 位

稲垣牧東

神の居る氣持へ樂な貪の底。

地 位

稲垣秋月

信仰の深さを忍ぶ眼の和み。

天 位

島原浪音

信仰は時々無理な掌を合せ。

軸

信仰の宣傳にするお吊ひ。

選者言

課題吟は題の如何に依つて作句も選
をするにも免ても苦手の場合がある。

範圍が狭いと同想句許り出来るし、余

り有振れたものであると平凡な句や

力の籠らないもの許りで選者泣かせに

終ります。作句も六ヶ敷いが、選者も

容易でない。

叔て潮風兄から突然の御命令で句箋

に向つたが我朱筆の遅々として進まな

いに焦つたが、折悪しく身邊に多忙な

事が出来愈々遅延するばかりで誠に申

譯がない。

當局の聲明や何かに脅かされ出所に

次ぐに出所で川柳人にも幾分の落付か

なくなつて居る傾きがあるが、前途を

見極めて慌てず騒がざる、川柳によつて

何物かを獲得したいものと思ひ、皆様

の一層の御精進を御願申し上げます。

(28)

▲第六十七回川柳句會

課題「遺族」

(清書順)

山本竹涼選

告別の遺族へ涙の眼が集む。 中野浪江

父の死も知らず片言微笑て。 同

思出の話遺族と夜が更ける。 同

父の死後母思ふ子のある強味。 沖村みも

名譽とは別に遺族にある惱。 塩出大洲

軍葬へ遺族小さくかしこまり。 同

遺家族へ弔辞が長い館府葬。 安元時子

未亡人世の荒波へ強く生き。 同

偏見へ軍人遺族の小さく住み。 藤井孫六

御通夜に躁く子等に泣けて来る。 同

髪切つて夫の遺志へ子を育て。 同

故郷へ歸り遺族は又涙。 始良春海

割切れぬ遺族へ諭す開教師。 谷本晚香

散華した知らせへ一家灯が暗い。 谷本晚香

焼香へ喪主は抱かれた小さい手。難波桂馬

出征の遺族たすける手が揃ひ。早川美貴子

亡夫知らない喪主に泣かされる。同

今は七い寫真に老母面やつれ。山内狂月

満堂の涙をそゝる小さい遺児。山西里江

いたいけな子の焼香に目がうるみ。吉里竜耳

二世兵遺族へ残す紫心章。新屋軟葉

扶助料が来れば寫真の子に供へ。同

一人子を捧げ館府の荷を纏め。島原浪音

五 客

遺児抱いて再轉住へ一苦勞。星野光葉

遺児抱いていざこれからと二人前。龍川巴水

紫心章寂しく拜む老夫婦。島原浪音

遺族にも春訪れて笑ひ聲。速水白舟

勲章が届き遺族を又泣かせ。早川美貴子

人 位 河島次彦

志願した冷たい評も聞く遺族。

地 位 山内狂月

父の計も知らず無心の児の笑顔。

天 位 関 五松

吊客が去つて新たな涙湧き。

評 前回とは總体的に句が整つて居

て半数近き入選率の好成績。皆さ

んの御精進に對し感謝致します。

五客 三才は手近かな日々あり

ふれた生活記録から生れたものと

して頂きました。殊に天位句は選

者も愛児を失へる体験、一層清新

に迫まる。

軸

インタンの留守へ區民の手が届き。

訂正二句

笑ふ現へ乳房與へて亡夫浮き。

だんくと亡夫へ似て来る乳房の子。

吊辞聞く遺族涙を新たにし。

吊辞今涙新に遺族席。

として止^{トメ}をさける。

▲第六八回川柳句會

課題「反對」

竹原白雀選

特選

ポストン

吉村芳乃

反對の意見區會の夜は更ける。

評 戦時下に於てキヤンプで特種な

環境は狭い部落内で種々雑多の思

想の人との雑居である。區會等に

は物識りが多くつて評議は反對に

次ぐ反對で揉るのが常である。

特選

マンザナ

速水白舟

突張つて鶴嶺湖の窓明り。

評 同胞收容所の其の一つである。

鶴嶺湖は如何なる同胞が收容され

て居るか既に定評。

特選

ポストン

松谷綠泉

眞劍の子へ反對の父も折れ。

評 一家内の者が頑固な者ばかりで

は一家の圓滿を欠く。世は既に二

世の同胞社會である。反對もあら

うが一世代たる者よろしく認識せね

ばならぬ問題か。

感 吟

心とは別な追従怖く訊き。 安元時子
抑し切つた渡米の悔が未だ續き。 河島次孝
婚約へ父母の意見も一致せず。 難波桂馬
反對の意見へ幹事汗を拭き。 同
反對に子に叱られる俺も齡。 早川美貴子
反對に座して算盤教へられ。 瀧川巴水
日本は晝だと偲び月に佇ち。 吉里竜耳
反對も聲を静めた議長振り。 島原浪音
忠孝の岐路にも惱む世紀の子。 関 五松
排日は愛國らしい口の泡。 安井静女

自 吟

ほととろに征く氣かそうと訊いて見る。

嫁ぐ氣の娘の純情へ父無言。

以上 八十句中十三句の嚴選

▲紙上互選 課題「外科」(高松順)

湧く涙拭く手を持たぬ子を迎へ。 安井静女
觀念の瞳 外科醫を信じ切り。 安元時子
切る前に洒落の一つも外科は言ひ。 島原潮風
氣味悪く外科醫音さすピンセット 同
縮帯が大きく見せる 外科歸り。 同
外科の跡いたましく見る松葉杖。 星野光葉
戯談の言へる外科醫に頼り切り。 森岡春山
外科室の内を氣遣ふ目の動き。 同
外科醫者の牙えたるメスへ緊張し。 谷本晚香
傷口も癒へて外科醫へ遠く居り。 安元時子
盲腸の痕を見せてるシヤワの中。 吉里竜耳
心配はないと外科醫は軽く言ひ。 山西里江
魔藥の香黙々走るメスの牙え。 関 五松
切開の痛さを側で母感じ。 同
肢膝踏み外科へ感謝の意を捧げ。 河島次孝
それとれた毛抜を置いて母は抱き。 同

外科手術親は諾否へ口を閑じ。河島次彦
切開と決つた朝に鴉鳴く。吉里竜耳

係り醫者信じ切つてゐる手術臺。同

ほやくが戦争でみがいた手術臺。安井靜女

▲紙上互選 課題「半分」(高点順)

此倍もあればとチヤキを握りしめ。山西里江

半分に減つた館府の窓灯り。関 五松

半分は男になつて遺児を抱き。河島次彦

半分になつた所内へ月が所へ。島原潮風

遊び連れ母は同じに切つてやり。山西里江

半分は宣傳もある時事ニュース。新屋敷葉

世渡りへ知慧を半分妻が出し。谷本晚香

半分は夢路となつた妻の愚痴。吉里竜耳

旗竿に吊旗は垂れて朝の風。同

半分は戯談にして非を論し。森岡春山

收入が半分になつた娘の出所。山西里江

半分は手真似異人と要を達し。安元時子

半分を聞いてかけ出す氣の早さ。安元時子
感激の答辭半分震ひ聲。谷本晚香

半分に値切つた罪を擔がされ。関 五松

半分は母の役目をする鰥。同

火の玉を見て半分は無我無中。島原潮風

半分は貯金にしたい月給日。星野光葉

半分が矢張り氣になる菓子箱。森岡春山

一息に半分きこす茶碗酒。島原潮風

半分はスポンで散らす子の食事。河島次彦

世界戦巨頭半分半旗あげ。安井靜女

▲次回課題

○句會

「感謝」 三句吐 選者未定

「快ニュース」 三句吐 選者未定

○紙上互選

「逃げる」 三句吐

例句(逃げる氣になつた残りの爆撃機)

食はず嫌い¹ 三句吐

創句（入齒して食はず嫌いに堅い物）

○初歩添削

釣¹

以上何れも八月二十日締切

▲谷本晩香氏よりの御寄附を感謝します。

▲シカブ小句會

六月七日

於溪山居

席題「旅」

崎村白津選

天位

稻垣牧東

時局下の旅に豫期せぬ舊友に遇ひ。

地位

矢形溪山

待つ友へ春野の汽車はよく送り。

人位

稻垣秋月

わが家にはまだ歸れない旅に出る。

客

歓迎のページを綴る旅日記。竹下ゆづる

行先でもてる旅なり廣い顔。矢形溪山

さすうひの旅に甘露の友の聲。稻垣牧東

三千哩旅の勞れへ友の情。稻垣秋月

吳も越も共に揺られて汽車の旅。山内不亂

佳

インタンの友は彼處だ汽車の窓。矢形溪山

旅の足とめて句友の聲を聞き。稻垣牧東

泌みぐと故郷の恋しい旅の雨。竹下ゆづる

再轉の希望そのまゝ旅枕。片山幽香

母なればこそお守りのある靴。竹下ゆづる

旅の宿明日も雨かと仰ぎ見る。山内不亂

さすうひの子を案じつゝ汽車の雨。片山幽香

旅に出て祖國のニュースに遠くなり。稻垣秋月

軸

國境朝のコーヒーに聞く旅路。

▲五選

席題「自信」（高点順）

専門の腕へ自信の荷を纏め。稻垣秋月

黙々と自信の肚に世評聴き。 山内不亂

生活へ自信が出来て家族呼び。 稲垣牧東

清涼の風へ自信の釣を垂れ。 矢形溪山

解決の糸口座談から拾ひ。 崎村白津

武骨者余興へ遠く箸をとり。 竹下ゆづる

自信なき仕事をとりし夜を悶え。 大原流葉

再建の今日へ自信の腕を振り。 稲垣秋月

自信ある腕へ一家の笑ひ聲。 稲垣牧東

自信なき喉へ末席汗をかき。 山内不亂

自信みなはづれ流轉の余儀ない日々。 崎村白津

迫害の出所へ神を信じきり。 矢形溪山

生活の自信がなくて轉住地に過ぎ。 大原流葉

自信ある技へ試合の肩を張り。 竹下ゆづる

出席者

崎村白津 山内不亂 稲垣牧東

稲垣秋月 竹下ゆづる 大原流葉

矢形溪山 片山幽香 以上八名

後記

ポストンの柳友稲垣夫妻とクリーヴランドの安武雀喜氏の来市を機として、歓迎句會の準備せしも安武氏は遅着のため間に合はざりしは遺憾であつた。

尚此勸議が急に成立したため、かねて清水其蜩氏より通知を受けたシカゴ在留柳人に通知することのタイムのなかつた事を残念に思ふ。

幸ひ當地留學中の歌人大原流葉氏の来席ありて小人数ではあつたが、轉住地を去つた淋しい吾々には誠に楽しい旅の一日であつた。

各地の柳壇へも寄書を送り歓談深夜に及び散會。

今週日曜夜は竹下ゆづる氏の招きにて、あろは亭に句筵を張る事になつた。少し先がけてお禮を申し上げて擱筆。 溪山



おもかげ

木内春波

輝吉が父母の呼寄せでサンフランシスコに来たのは二十二歳の春だった。父母は其の頃カルホルニヤ街に日本人専門の船宿屋を営業してゐた。米國經由歐米へ旅する客、歐米を巡つて米國を經由して日本へ歸る人、それ等の旅行者を相手に可成手廣く營業してゐたし、裕福でもあつた。輝吉は其の秋から愉快に學校へ通はせて貰つた。

通學四年——輝吉がハイスクールを大きな體の二十六歳で卒業した年の秋深みゆく頃、父は友人の勸で、其の頃誰も彼も儲けてゐた米作農業に手を出して、本業の旅館まで人手に渡さねばならない程の大失敗をして終つた。結局、輝吉は大きな希望も、大學へ行く望みも断念せねばならなかつた。その年も暮れやうとする頃、寒い桑港の朝霧をつひて、渡船上にオーバの襟を立て、毎日彼岸のオー克蘭ドの花問屋へ、帳簿係兼事務員として通ふ身になつてゐた。

母は父の失敗に力を落してぶら／＼病にかゝり、今迄とは變つた、小さなうす暗い借家のフラットで寝たり起きたりして日を暮してゐた。父は漠に男であ

る。失敗の苦しさも、表に表はさずに、こつ／＼働先の或銀行ビルの掃除夫に通勤してゐたし、生活には困らなかつたが、家の中は闇だつた。

輝吉の働先、稲田家には最近日本の女學校を卒業して歸米したばかりの静子がゐた。静子は来春から登校するのだと言つて、近所の白人の家庭へ毎夕英語の手解をして貰ひに通つてゐたが、晝はなにもせずにお嬢さん然と遊んでゐた。手廣い店で就働人もかなり大勢ゐたが、米國育の青年や、其の頃もう五拾歳近い老人ばかりで、歸米早々の會話も不自由な静子には二世の若者達と語る術も知らなかつたし、支那賭博の話や卑猥な話に興じて居る老人連にも齒が立たず結局話相手は輝吉一人だけだつた。

翌年の春、静子が通學する頃には、學校の餘暇には必ず店の發送部へ来て、グラデオラや花百合を包装紙につゝむのを手傳ひながら、女學生の好きな日本唄を小聲で合唱する程に打ちとけてゐたし、晝休みの時などは輝吉に教科書の手導をして貰つたりした。

折にふれて啄木の歌を暗唱したり、藤村の詩集や菊地寛の小説、又は吉屋信子の『女醫』などの批判をしたり兩人は文學好きでもあつた。若い兩人の甘い戀は斯うした零團氣の中に培かはれてぐん／＼伸びて行つた。マント・タマルバイのハイキング、金門灣の波頭に散る夕陽、太平洋の波打寄せる海邊のピクニック、兩人は若くて楽しかつた……。

然し、冷たい現實は、若い二人の男女を、そのまゝ何時までも幸福にしては置かなかつた。横恋慕に狂つた中年男——稻田家の花畠の方を支配してゐた石岡鉄次が感謝祭の夜、稻田氏が従業者一同慰勞の意味で、全部招待して御馳走した其の夜、酔どれた石岡は日頃の想ひを野獸化して、遂に、静子の處女を奪つてしまつた。明朗快活な静子も、其の翌日からもう今迄のやうに談笑もしなかつたし、發送部の方にも余り出て来なかつた。

輝吉は彼女の浮かない、考へ込んだ顔色を不思議には思つたが、女の、それに若い女性の日々の変化を、訊いてよいものやら悪いものやら迷つたし、別にきゝたゞしもせず四日五日と、話相手の無い無聊さに過ぎていつた。あの日から数へて六日目の夜である。歸宅した輝吉を一通の手紙が待つてゐた。それは静子が惱みに惱んだあげ句の悲しい告白の手紙であつた。

輝さん、妾は死んでも死に切れない苦しみを今味つてゐます。貴郎を信じ貴郎を愛するが故に、何も彼も——父母にも話せない——凡ての事情をお話し致します。以前の静子を愛してゐて下さつた貴郎ですもの……此の悲しい妾の秘密も——若しみを、貴郎に話す事によつて救はれたうございます。今迄貴郎へ捧げた約束の啖吻は清らかな静子の啖吻でした。將來をお約束した處女の……でも妾の今日は汚れた静子です。

狂った男にもせよ、又野獸にせよ、貴郎に捧げる可き處女性を、失つてしまつた今日の妾は、もう貴郎からは何の値打もない者になつて終ひました。たゞ形體だけを保存して居るミイラ同様です。許して下さい。でも、眼に見えない汚れですから、今更清められるものではありません。それが悲しくて、口惜しくてならないのです。

手紙を握つてゐる輝吉の手はぶる／＼震へ出した。鉛の熱湯を注ぎ込まれたとはかう云ふ時の形容だらう。胸は憤怒で煮へくりかへるのであつた。くどくどしく長い静子の手紙を読み終りもせず、ずた／＼に引裂いて紙屑籠に叩き込んだ。静子の悲しみに同情する心のゆとりもなく、

「畜生！ 畜生！ 男も女も畜生だ！」

と聲立て、叫んだ彼の両頬を、熱い涙が流れ落ちた。

輝吉は、其の翌日から身體の具合が悪いと言つて、務め先を休んでしまつた。稲田夫妻は心配して桑港に來たついでだと言つて見舞に立寄つてくれたりした。燈臺下暗し、稲田夫妻は何も知らなかつた。磊落な稲田氏は、折にふれて、

「静子の婿さんは、輝吉さんだよ。」

なぞと、冗談を言ふだけに、輝吉を信用もし、可愛がつゝゐた。

「なかに瘦れだよ、クリスマスを控へて東部向け出荷が、思つたより多い。君のやうに一生懸命に働けば瘦れも出るさ、あはハハ……何、二三日やつくり

休めば又元氣になるさ、心配しないで休み給へ、君の代理は讓次でやれるから、此の日曜には家の静子と、又ハイクでもすれば大丈夫、恢復受合ひだ。あは、
.....

知らぬが佛と云ふか。稲田氏は、これだけ愉快さうに言つて見舞の鶏の紙包を置いて細君を連れて歸つて行つた。

輝吉の病氣は、一週間経つても癒らなかつた。十日目に又静子から手紙が来た。父母が輝吉の病氣と、彼女の浮かない顔とを結びつけて、『夫婦喧嘩だらう』と、父から冷かされた事、見舞に行くと勧められた事などを書き添へて、其の後の事情やら彼女の氣持など、恐る／＼書き加へてあつた。

中年をすぎると孤獨でゐた石岡は執拗に、度々脅迫しては静子の身體につき纏つてゐた。若し言ふ事を聞かねば、兩人の關係を父母にも知らせ、世間へも發表すると、嚇されて處女の心は怯え、苦しみ惱みつゝも引摺られるやうについて行かねばならなかつた。

『妾は猫の前に置かれた小鼠同様です。逃げるに走れず、もう斯うなつたら、どうせ汚れた身體ですもの。そうして地獄に落ちてゆくのが妾の運命かも知れません。彼の男は若し結婚を承認しなければ、妾の一生を闇にしてやるとも言つて脅迫します。妾はもう、どうする術も知りません。』
とも書いてあつた。

輝吉は手紙を読みながら、其處に最後のものを了解した。静子は斯う書きながら、身も心もぐんぐん石岡に引付られてゆくのを心の眼で讀んだ。どうせ斯うなつたらと言ふ口實に隠れて、遠く輝吉から離れて行く静子だった。恋は語るものでも、夢みるものではなく、行ふものだと言ふことを輝吉が心の奥で悟つた時、今迄余りに空想的恋愛に酔つてゐた自分が、世の中の一番馬鹿者に見えて腹立たしくて耐らなかつた。

それから四五日して、輝吉の姿はもう桑港の深い冬の霧の中には見當らなかつた。此の苦惱からのがれ、精神的痛手を癒す光明を求めて、父母にも無断で夢遊病者の如く、鳴響く除夜の鐘を港の街頭に聴きつゝ、去りて歸らぬ歳と共に何處ともなく姿を消したのであつた。

それからの輝吉は、北に南に、西から東へと放浪の旅を續けて、支那賭博を知り、濁酒の味を覚え、金で買はれる恋も知つた。生活するためには、掃除夫に、皿洗ひに、洗濯屋の洗場に、そして農家から農家へと收穫期を追ふてブラケットとスーツケースを提げて流れ歩く群にも加はつた。日米兩國の中等教育を受けて、思慮もある筈、理想も高くなければならない筈の青年輝吉も、今日あつて翌日のない消極的の生活、人生の裏町通りのほの暗さを行く放浪者の一人となつてしまつた。

桑港へ残した老齡の父母を想ひ、初恋の女の體臭を、折にふれて何かに感ず

る時、火酒を煽つて、支那賭博のテーブルの豆数の刺戟に良心を麻痺させてのがれた。斯うした泥中の生活を三年四年と迎へ五年六年と送つて行つた。

彼の両親は、失ひし息子の行方を尋ねる術も切れ、寄る年波に勞働も出来なくなつて、老後を生れ故郷で暮すべく、歸國の途に就くといふことを風の便りに耳にした輝吉は、急に居たまれなくなつて、其の頃働いてゐたフレスノの或農園を飛び出して、せめて父母の後姿だけでも見度いと思つて、桑港の難者の中に交つてゐた。両親を乗せた太洋丸は次第に遠ざかつて行く……

『お父さん、お母さん！ 放浪の子の罪を、不孝を、許して下さい。』

荒み切つた彼の心も、このひときだけは熱い涙で洗ひ清められたのであつた。一夜を思ひ出の桑港の霧に紛れて宿り、其の後の稲田静子の動靜をも窺がへば、恨みの兩人は、年齢の差を楯に両親の反對を受けたが、静子が既に、石岡の手中にあることを知つた稲田氏は止むを得ず結婚の承認を與へねばならなかつた。無一文だつた石岡へ、夫婦が生活できるやうにと桑港のゲリー街の切花屋の賣物があつたのを、買ひ與へて營業させた。斯うした泥棒に追銭の愚も、骨肉の娘なればこそ……

其の後、不能とのみ思はれた静子と石岡の恋は平凡に實を結んで、静子は二男一女の子供の母となつたのであるが、それに反して、輝吉の自暴自棄な放浪生活は涯しなく續いて行つた。そして――

戦争の餘波をうけて、此の沙漠に收容されて来た輝吉は、氣候の変化の爲か、今まで重ねかさねた不懾生の報ひか、將又不孝の罰か、親しき友達もなく孤獨の淋しい體を、人の情に縋つて病床に死を待つ身とはなつたのである。

老人は、惠美子が電燈を消しに這入つて来たのも知らずに、身動きもせず、両眼をかたく閉ぢたまゝ、追想に耽つてゐる。

『母の静子も娘と一緒に第三館府に住んでゐるのだ。一度會つて見度い。あわい恋心を感じて、どきつとした。』今更逢つてどうなる。昔の児供の遊戲に似た恋を、人妻となり、母となつて今迄記憶してゐる筈もなく、もし記憶に残つてゐたところで、お互に年が寄りそんな感傷的な神経はもう、焼きつくされてゐる。自分も今、死の影に直面してゐるではないか。だまつて己れ獨りで、誰彼に知らさず——昔の恋人に似た、此の娘の顔を眺めて居ればそれでいい、ではないか。どうせ死んで逝く身に、此の上他の人々に迷惑を掛けることはない……何も知らないあの娘には話すまい。親切な氣立のやさしい娘に何の罪がある。石岡は死んで、若かりし頃の葛藤の幕は閉ぢたのだ。若氣の一筋に自分が落ちて行つた暗い道も、自業自得だ。誰の罪でもない。今此の娘に知らしめて其の母の過去を洗つて何になる……『輝吉老人は頭の中で結論をする。それから過ぎた二週間——アリゾナ州のモハベ沙漠の大きな夕陽が、赤々と血色に染つて、遙かな加州の山蔭に沈む夕暮、全身の肉と云ふ肉は残らず痕

に喰ひ盡されて、古木輝吉の六十年に近い人生の幕は閉ぢられてしまつた。語らなかつた彼に代つて、所内の新聞は「古木輝吉」の死亡廣告を載せた。會葬者の群に交つてゐた石岡恵美子と母の静子とは、兩人異つた感慨に、兩頬を傳ふ涙を、交るゝ拭いてゐた。

三十余年前、希望に満ちゝた青年輝吉をアメリカ大陸に送り渡した太平洋には、血腥い風が吹き荒れ、彼我の戦闘は何時果てるやも知れずに續けられて行つた。(モウリ)

三大製品

大黒印白味噌
大黒印宝干麴
US印亀甲萬



寶干麴

結果
百ハセント

羅府醬油釀造會社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO.

編輯後記

○「ポストン文藝」は何時迄續けますか、轉住所開鎖後と雖も續刊したいものだ、先輩の御言葉である。さうだ、假令「ポストン」が刑場の露と消えやう共、我々同胞が健闘を續ける限り、雜誌も共に生々發展させて行きたいものである。

○本誌に新人宇江乃氏と進藤舟水氏の御寄稿を得たことを喜びたい。

○去る十一、十二日兩夜中央廣場に於て、久方振りに第一第二及び第三力士の聯合相撲大會が催され、相撲ファンを歡びせてくれた。又、近く岸山画伯の個展が開かれ、次いで各部落の隠れた藝術家總出演の吹寄會が計劃されてゐる。

○短歌の選者永瀬勇氏が東部へ、又、本誌の爲常に御助力下さつた進藤舟水氏がデンヴァーへ轉住され、同じく貴家璋造氏、木内春波氏、久留島御夫妻共に近く羅府へ歸還されるとのこと。御健闘を祈る。

訂正

前號所載貴家氏執筆「花柳徳八重さん」第一頁十七行「舞、踊、科」は「舞、踊、科」の誤りに付、茲に訂正す。

上段一前列向つて右より森重男、

寫

池田錦城、森博、後列、植野直人、

眞

刈谷正、刈谷米男、末永晴雄、大

説

隈桂介、関源藏の諸氏。

明

下段一腰投げの手で刈谷米男君が

明

原田敬君を倒して、觀衆をワツと

明

熱狂させた場面である。

○本協會に御寄附下さつた龜重久子嬢、芳川積三氏、花柳徳八重師匠、楠瀬正美氏、山田如骨氏に對し感謝の意を表す。

ポストン文藝

第八月
第八号
(外埠加郵費)

第一卷
第九号
(定價五仙)

編輯人

松原信雄

同 有田百

同 島原潮風

同 重富初枝

印刷所 ポストン印刷所

發行所 ポストン文藝協會

POSTON POETRY CLUB,
UNIT 1 CITY HALL, POSTON, ARIZ.

POSTON POETRY
AUGUST 1945

